

第三十八回

神道講演全国研修大会

会場 住吉大社（大阪）

記念講演

一隅を照らす

椿大神社 宮司

山本行恭

記念講演

挨拶

先人の求めし所をもとめよ

住吉大社 宮司

加藤司郎

住吉大社 宮司

加藤司郎

感謝とお祓い

椿大神社 権禰

小倉雄大

すばらしい日本

椿大神社 禰宜

田中 淳

憧れの鯛

倉神社 宮司

岡田 順

氏子について

妻山神社 禰宜

永代優仁

三大神勅

三島神社 宮司

宮崎貞臣

神社・神道の裾野を拡げる

住吉大社 権禰宜

小山手公平

神との対話

花岡八幡宮 禰宜

村上浩基

初宮詣にて

駒林神社 宮司

中山直紀

神職は安国を目指す

椿大神社 出仕

熊谷 昭

上げ馬批判に直面した当事者としての

神事継承についての一考察

多度大社 権禰宜

伊藤彰教

社寺参詣と鉄道

多賀大社 権禰宜

森 智宏

なぜ田の神を祀るのか、

それは駱駝に聞け

宮尾八幡宮 宮司

河本文夫

奉務神社について

八坂神社 権禰宜

湯谷由紀子

道の精神

― 神道と名付けた先人の知恵 ―

伊勢部柿本神社 宮司 塩崎 昇

氣高く強く一筋に

阿賀神社 権禰宜 松井祐一

優しい神社とは

大阪護国神社 権禰宜 岡部和久

神 楽

白山神社 宮司 山下裕嗣

一隅を照らす

椿大神社 宮司 山本 行 恭

おはようございます。今月も朔日参りにようこそお参りくださいました。早朝六時にもかかわらず、全国各地より約百名の皆様にご参拝をいただき、心より御礼を申し上げます。さて、ただいま宮司以下祭員三名の奉仕により、御神前にて御祈願を申し上げましたが、実はこの間に、全神職が神社境内の各所を酒塩を以て清祓いを行っております。このお清めは毎月のはじめに区切りとして必ず行っております。

神道では、一年を上半期と下半期に分け、六月と十二月は大祓いの月と定められております。今月六月は、夏越の大祓式を斎行します。皆様も形代に罪穢れを移し、神社にお納めいただいているかと存じます。大祓式では、この形代を御幣川おんべがわに流して、罪穢れを祓清

めます。この大祓式を以て上半期の罪穢れを祓い清め「無」になったところに、神々の御神徳を受けられ、来たる下半期を健やかにお過ごしいただきたいと思っています。

『備後国風土記』という書物のなかに、蘇民将来、そみんしょうらい 巨旦将来、こたんしょうらい 兄弟の逸話があります。あるとき、北海の武塔神が、南海の女神を娶ろうと南方へ赴いた際、運悪く大嵐に見舞われてしまいました。頭を悩ませつつ歩いていると、明りの灯された立派な屋敷があったので、一宿一飯にあずかれないだろうかと尋ねると、屋敷の主である巨旦将来は「こんなに汚くみすばらしい者は家に上げることはできない」と門前払いにされました。仕方なく歩いてみると東屋のような小さな家がありました。ここを訪ねると、家の主である蘇民将来は「こんな家で大したおもてなしもできませんが、どうぞおやすみください」と家に上げ、粟飯をふるまうなど、できうる限りのおもてなしをしました。翌朝、武塔神は「この恩義は決して忘れません。改めてこちらのお家を訪問し、その際必ずや恩返しをいたします。」といって家を後にしました。そして武塔神は約束通り、改めて蘇民将来の家を訪ねました。そして蘇民将来の娘に茅で編んだ輪を授け「今年は疫病が流行るかもしれない。これを腰に付けていれば、その難を逃れることができます。」と伝えました。そして時が過ぎると

厄災が起こり、茅の輪を身につけた蘇民将来の一族以外は悉く滅びてしまったのです。これが、夏越の大祓式での「茅の輪くぐり神事」のルーツです。

ただいま武塔神の恩返しの話をしました。が、近頃こういった「御礼をする」という感覚が失われつつあるような気がしてなりません。今はお中元シーズンです。お中元が届くと手紙を返すのが常識ですが、手紙や連絡さえ返ってこないお宅が増えました。これでは、しつかり届いているのかもわかりません。

昭和二十年の終戦直後、昭和天皇が東京の丸の内警察署の横、第一生命ビル三階にあるGHQのオフィスへマッカーサー元帥をお訪ねになられました。元帥は「命乞いにでも来たのだろう」と高を括っていましたが、陛下は「戦争の全責任は私にあります。私の命と皇室の全財産を貴国に委ねます。しかし、国民が飢えております。どうか物資の援助をいただけないでしょうか。」と、皇室全財産目録を差し出しつつ、嘆願されました。マッカーサー元帥はこの昭和天皇の国民のために命を顧みないお姿に「はじめて神を見た」と感激し、陛下がお帰りになられる際、丁重にお見送りをされたそうです。そしてこの後には実際に物資の援助が行われ、国民は飢えを凌ぐことができました。

時を経て昭和五十年。戦後三十年が過ぎたころ、昭和天皇はフォード大統領の晩餐会にご招待を受けられました。同席者のキッシンジャー長官は「また物乞いをするに違いない」と考えていました。ところが陛下が挨拶に立たれた際、「終戦直後、日本の再建の為に援助をいただいた御礼を申し上げたく参りました。積年の願いがようやく叶いました。」とお言葉を述べられると会場はスタンディングオベーション。その後、天皇皇后両陛下が米国各地を訪問された際には、日の丸と星条旗で街道が埋め尽くされたそうです。こうした陛下の御務めによつて、我が国の平和や日米の良好な関係性が築かれたと言つても過言ではありません。恩に報いることを神道では「報恩^{かえりもうし}」といいますが、この重要性を昭和天皇御自らが身を以てお示しになりました。

さて、皆様のご自宅の近くの神社にもきつと茅の輪が設置されていると思います。是非家族と一緒にくぐってください。その際、「祓へ給ひ清め給へ」と唱えていただくだけでなく、「上半期も神々の御神徳によつて、無事に過ごすことが出来ました。おかげさまで。ありがとうございます。下半期もどうか御護りください。」とこれまでの感謝と、これからの祈りを捧げていただきたいと思います。

神道は祓いに始まり祓いに終わります。伊勢の神宮では月次祭にてお祓いが行われます。その際、神職が持つ神には「二分^{いちぶ}」と記されており、「一」とは我が身の表面についた汚穢を祓い、「分」は我が身の内なる汚穢を移すことを意味します。これを身体に撫で付け、息を吹きかけることで、罪穢れが清められるとされます。

当神社では、皆様にお配りした形代に氏名・生年月日を書き、拇印を捺し、それを全身に撫で付け、「ふんっふんっふんっ」と三度息を吹きかけることで罪穢れを形代に移します。この形代を夏越の大祓式で唐櫃に寄せ、祭員とともに茅の輪をくぐり清めます。さらに形代を流す「御幣川」では、まず酒塩で川を清めたうえで流します。こうして丁重にお清めがなされた形代は川を下り、中間の亀山市名越町^{なごし}という場所で安楽川と合流し、鈴鹿川となつて伊勢湾に流れ、罪という罪が祓い清められます。

地球環境汚染や太陽フレアによる被害。我が国のみならず世界中が混沌としています。このようななかで、神々からの靈力をいただき下半期も健やかに過ごすためには、「無」でなくてはなりません。例えば、幼児は満腹時には必要以上に食べたりしません。しかし

大人になると欲が生まれ、無理に食べたり、タッパーに入れてでも持ち帰ろうとしたりします。欲によつて常に満たされていては、いざという時に力となるものを取り入れることができません。御神徳というのもこれと同じです。欲や不浄を取り去つて「無」になることで神々からの靈力を戴くことができます。ですからお祓いが重要なのです。

そして受けた御神徳を絶やさぬためには、「おかげさまで」「ありがとうございます」と感謝の心を持ち続けること、そして、掃除を行い、清浄を保つことが重要です。当神社でも毎朝神職が清掃を行います。その際、参拝者に「おはようございます」「ようこそお参りくださいました」と大きな声で挨拶することを徹底しております。そうすると相手も朗らかに答礼してくださいます。元氣よく声を掛け合うことで、お互いが清々しく氣持ちの良い一日の始まりを迎えることができます。これほど素晴らしいことはありません。

一隅を照らすとは、伝教大師がしたためられた『山家学生式』のなかに記されています。「国の宝とは何物ぞ、宝とは道心なり。道心ある人を名づけて国宝と為す。故に古人のいわく、径寸十枚これ国宝にあらず、一隅を照らす。これすなわち国宝なりと」

道心とは、道を極めようとする心、即ち精神を体得するために修行をすること、私ど

もは、その場その場において必要な光を、自らが発するようになれ、というのが一隅を照らすの真の意味。つまり、その場その状況において役立つ人間であり、片隅の誰も注目しないような物事をきちんと取り組む人こそ尊い人である。そして世の為人の為に貢献することが出来る。そういうことを考えて実践すれば良いのだという意味です。

こうして戴かれた大神様の御加護の元に、今日一日の安全と、迎える下半期も健やかに過ごしていただけますことを心よりお祈り申し上げ、朔日参りのご挨拶とさせていただきます。

本日は早朝にもかかわらず遠路各地よりご参拝をいただき、誠にありがとうございます。

記念講演

挨拶

住吉大社 宮司 加藤 司 郎

皆様こんにちは、住吉大社の加藤でございます。

先ずもって、茲に第三十八回神道講演全国研修大会近畿大会が開催されますことを心よりお慶び申し上げます。何卒宜しくお願い致します。

では早速に講演に入りたいと思いますが、最初に少し自己紹介をさせて下さい。やはり、このような研修に参加しますと、お集りの皆さんと大変良いご縁が結ばれるわけでございまして、これも研修会の重要な意義の一つであろうかと思えます。これからさせていただきます自己紹介の中に、何か皆様方にご縁を感じていただくようなことがあれば大変有難く思いう次第です。

私は、昭和三十年に岡山市に生まれまして、物心がついた頃から大阪の天満というところ

ろで育ちました。天満には古い歴史を持つ天満市場というのがありまして、堂島の米市場、雑喉場の魚市場、そして天満の青物市場が近世大阪の三大市場と謂れ、私の実家はそこで青果業を営んでおりました。今も兄が後を受けて商売をしています。日本一の長さを誇る天神橋筋商店街がある大変にぎやかな大阪らしい街です。

古くからこの天満の商人達は大阪天満宮の有力な氏子で、天神祭の講社を運営しております。又、修験道の山であります大峰山への信仰も厚く、市場全体で講を組織し、有名な「西の覗き行」などを熱心に行っております。やはり、商売人は信心深いんですね。店の繁昌と家族従業員の身体健康を願うわけです。この大峰山の行には慰安旅行のような要素が多分にありまして、行の後は里の温泉で大宴会をするんです。店で働く若い人達は、年一回のこの大峰山を楽しみとしておりました。やがて、従業員であった人が自分の店を持つようになると、自分たちもしてもらったように、自分の店の若い人を連れて山にいくわけです。こうして、大峰信仰が長く受け継がれて来たんだらうと思います。

このような天満市場におりましたので、私も天神祭や大峰山に小さいころから接しておりました。

小学校の三年生か四年生の時の担任の先生がお坊さんでありまして、私が大峰山に行っ

ておるものですから、授業でその話になりまして、教壇の上に椅子を乗せて、そこで私に「西の覗き行」の恰好をさせてクラスの皆に、加藤君はこんな修行をしてるんだよ、と紹介され、今でも大変恥ずかしかったことを思い出します。

又、正月元旦の伊勢神宮参拝へも父に連れられてよく行っておりまして。その折に父に買ってもらった袋守りは今も手元にあります。流石に古くなっておりますので大切に家の神棚に納めてあります。六〇年以上見守りを受けておるわけであります。

このようにして中学一年まで過ごしましたが、中学二年の時に、出雲の地、島根県の松江市にあります学校に転校しました。実家は大阪のままですので寮生活ということになります。

今考えますと、この松江・出雲の地とのご縁が大変大きいものであったと感じております。

この学校は、一般的な学校とは教育方針が違っておりまして、当時、マスコミにも大きく取り上げられることがありました。なかなか経験できないような教育を受けたと思っております。中学二年から高校卒業までの五年間をこの松江で生活しました。北は北海道から南は九州まで、又四国など、県外の生徒が多く、卒業の時には、先生、卒業生、在校生

が共に涙を流して松江駅で壮行会を行うようなことでありました。

この学校に、寺内毅という老先生がおられまして、よく次のような事を話しておられました。「僕は杉浦重剛という立派な先生の弟子にあたります。君たちは僕の教え子ですから、その、杉浦重剛という先生の孫弟子にあたりますよ、このことをよく覚えておいて下さい」ということでした。その時は杉浦重剛というお名前も当然知りませので、なにを仰っているのかよくわかりませんでした。

私はこのあと、大学を出てから乃木神社に奉仕することになるのですが、御祭神の乃木將軍は晩年学習院長として、明治天皇の皇孫殿下、後の昭和天皇様の教育に当たられますが、明治天皇崩御の跡を追ってご夫妻で御殉死を遂げられます。そしてその後、乃木將軍の後任として、東宮御学問所で倫理御進講をもって昭和天皇様の教育に当たられたのが、この杉浦重剛先生であつたのであります。その任の期間は折に触れ、乃木將軍の墓前に、昭和天皇様の東宮御学問所のご様子を報告されておつたようであります。

乃木將軍とは深い交わりがあつた方です。

又、この松江出雲の地は、佐々木源氏の流れを汲む乃木氏発祥の地でもありました。佐々木高綱公の墓所といわれるものが設けられている松江善光寺というお寺が、宍道湖畔の丁

R線乃木駅の近くにあり、乃木將軍の遺髪塔も乃木氏発祥の地の縁によりこの松江善光寺に建っております。

私は後年乃木神社に奉職の身となったわけですが、この出雲の地、松江での学生生活の時に、既に、このような深いご縁をいただいておったわけでありまして、全くこれは、不思議なご縁としか思えないわけでありまして、感慨深いものがございます。

「見晴るかす 出雲国原最中なる 神魂の杜にそそり立つ神」

私が通っております学校は、古代出雲国府がおかれた松江の大庭の里に鎮座します、神魂神社の御神域の杜の中に建っております。この杜の中で五年間教育を受けたわけがあります。

この歌は、「君たちは、こういう出雲の歴史ある素晴らしい地で学んだんだよ、いつまでも忘れないで下さい」という先生からの送別の歌であります。

我々は、この歌を自分たちの手で石に刻み記念の歌碑を建立しました。この歌を詠むたびに、往時のことが蘇ってくるわけであります。

そして、現在は四十五年間の東京乃木神社での奉仕を経て、これも又深いご縁の下に郷里であります大阪の地に帰って参りまして、住吉大社に奉仕することとなったわけであり

ます。誠に、誠に、ご縁によって導かれているんだなとつくづく思うわけであります。以上のようなことで、少々長くなりましたが自己の紹介をさせていただきました。

《講演》

先人の求めし所をもとめよ

それでは、これより本日の演題に入らせていただきます。

本日の演題は、「先人の求めし所をもとめよ」といたしました。これの元の言葉は、「古人の跡を求めず古人の求めし所をもとめよ」と云います。古人のところを先人とし、上の句を省略しております。これからの話の中では、この元の言葉をなるべく使って行きたいと思います。

これはもう有名な言葉でありまして、皆様方には既に知っておられる言葉であろうかと思えます。

俳句・俳諧の大家であります松尾芭蕉が弟子に与えた言葉といわれています。

この弟子といわれますのが、森川百仲と云う人で、近江（滋賀県）彦根藩の藩士であります。武士でありますので武芸は勿論のこと・学問・芸術・芸能・風雅の道、所謂・六芸に通じた多芸多才の人であったといわれています。俳句は芭蕉を師としておりますが、逆に芭蕉は、絵のことなどは、この弟子の話を参考にするなど師弟を超えた深い交わりであったといわれています。芭蕉はこの多芸多才、六芸に通じておった弟子に許六という俳号を与えました。芭蕉の高弟「森川許六」といわれる人であります。

この許六が江戸を辞して国元に帰るとき、共に別を惜しんで、あれこれと一日語り合い、いざ別れという時に、芭蕉が送別の辞として与えた言葉といわれています。

六芸に通じる程の許六の才能を十分に認めつつも、多芸多才故に、その身を案じ、「あなたのその才を、これからどのようにに生かし、何処に向かうべきなのか」という師から弟子への教え、投げ掛けのような言葉ではないでしょうか。

「古人の跡を求めず古人の求めし所をもとめよ」

この言葉のいう所はなにであるのか、それぞれがお考えいただければ結構だと思います。

「一通り学び得たならば、いつまでも師の跡を追うことばかりせずに、師が目指してい

た所は何処であるのかをよく見極めて、あなたも、その所を求めなさい」と、私は読んでおります。

今日、この言葉を初めてお聞きになった方は、どうか、この言葉だけ記憶に留めて下さればそれだけでよろしいのではないかと思います。

これから述べますことは、あくまでもこの言葉から私自身が感じとったこと、または、これまでの経験の中で、この言葉とのかかわりのようなことを述べるだけのことでありますので、その程度の話としてお聞き下さい。

我々は、何事においても学ぶという行為で物事を理解し習得するわけですが、この学ぶことは、物を「まねること」だといわれております。まねをする、まねをするという。まねをして言葉を覚える。まさしく聞いたことをそのまま覚え語る、算数のように答えを求める勉強でも、最初に答えの出し方を教わらないと何も解らない、答えの出し方をまねるわけです。こういったことを繰り返しながら、知識としてそれを自分のものとし、経験を重ね、成長してゆくわけですから、これが、即ち、「古人の跡を求める」行為であって、先に示された跡を「まねぶ」という事だと思えます。

神職としまして、奉仕を重ねてまいりますと、お宮の事、御祭神のこと、氏子さんの

事、一通り知識を得て、また、いろんな経験も積み、まあまあ、不安もなく奉仕が出来るようになるわけでありまして、一通り落着くわけであります。さて、そこで、この言葉となるわけです。

「古人の跡を求めず古人の求めしところをもとめよ」

「二通り学び得たならば、いつまでも師の跡を追うことばかりせずに、師が目指していた所は何処であるのか、そこをよよく見極めて、自分もその所を求めなさい」ということが出てくるわけであります。

禅の方の言葉にも、次のような言葉があります。皆さんもよく知った言葉です。

「百尺の竿頭に一步をすすめよ」という言葉であります。「百尺の竿頭」とは、長いながい竿のてっぺん、乃ち修行を重ねてやつと悟りらしきものを得たところだと思いますが、やつと上り詰めて、もう、だいたい解った。後はこの教えのまま行けばよい、といったところで、この言葉となるわけです。

「百尺の竿頭に一步をすすめよ」です。悟りきったような処・竿頭・竿の先から更に一步踏み出せということです。そのようなことをすれば、竿の先に道はないのですから、真っ

逆さまに落ちてしまうわけですが、敢えて竿の先から奈落に落ちてみよというわけです。

そして、その悟りの身をもつて、本来の向かうべき道をそこから改めて求めよ、ということになるわけです。この言葉と、芭蕉の言葉とは、少し意味合いが違いかもありませんが、「本来の所を求めよ」いうことを諭す意味では同じであろうと私は思うのです。

私は長い間、乃木神社で奉仕をしておりました。当時、宮司さんが、この「求めし所をもとめよ」でなければならぬ、とよく言っておられました。

御祭神の乃木將軍は誠に偉い方で、その御自歴をもつて、万人が齊しく仰ぐ神ともなられた方がありますが、我々はそれを唯々、有難がつて、御祭神を、こういう御自歴で、こういう功績をつまれ、大変偉く有難い方ですよ、と崇め称えるだけではだめであつて、乃木さんを御祭神と仰ぐ身としては、「乃木さんが真にめざされた所は何であるのか、今の世に御祭神坐しませば、今の状況をどのように思召すか」というふうになんて考えなくては神職の奉仕とはならない。

つまり「神意奉行」、神意を伺い、それを奉行せよということになるわけであり、なかなか厳しいことではありますが、しかし、これは不可能なことではないのであります。乃木さんの誠に大きな、沢山の御神徳の中から、その満分の一でもよいから得られる物が

あれば、いやなくてはならないのですが、ただそれ一つを掲げて一生懸命進めばよい、ということになります。

又、崇敬会の会長は常々、「我々一人ひとりが考えなくてはならないのは、あの、伊勢の式年遷宮で執り行われますお白石持ち行事で、持ち寄る石はまことに小さいものであるが、一人ひとりの真心によって敷き詰められたお白石によって、あの広大な唯一無二の御神域が形成されるように、崇敬者一人ひとりは小さな力ではあるが、それぞれの乃木さんの御神徳を一つひとつ持ち寄れば、大きな御神徳の宣揚になるのだという気持ちを皆さん持ちましょう」とよくおっしゃっておられました。

神徳を齊しく仰ぐその思いを、いかに実践に向けて行くかということでもあります。「求めし所をもとめよ」という意思をしつかりと持つことが大切であると言えるわけです。

初任神職、中堅神職にあつては「古人・先人の跡を」しっかりと求めなくてはなりません。しかし、やがて指導の神職ともなれば「古人・先人の道に立つて」「古人・先人の求めし所を求め」なくてはならない立場に立つわけであります。

私は、お宮にみえる、神務実習の学生に、「神職とはいわず、社会に出れば必ずその年代年代で担うべき役割というのがある。何れ必ず誰かが、その責任ある立場に立たなくてはならない時がきます。そのために、与えられた立場での役割をしっかりと務め、いつ責任ある立場に立つても困らないようにしておいて下さい」といつも話しておりました。ボイススカウトというところの「そなえよ常に」ということであります。

また、新人の神職さんには次のようなことを言っておりました。

心得として、「先ず、返事」そして、「先ず、行動」

このことだけです。

呼ばれたら大きな声で返事をしなさい、そして、すぐに行動に移しなさい。

「加藤君」と来ましたら、大きく、はっきりと「ハイ」です。そしてすぐさま行動です。「ハイ」は物事をしっかりと正面から受け止める心構え。大きな声は、心の発露の現れであります。

そしてそれが、すぐさま、行動として現れる。

「心の発露と行動の機的作用」が瞬時に一体となる。大事なことだと思っています。こ

のような説明はいちいちしませんが、ただ、大きな声で「ハイ」の返事、そして「先ず行動」ですよ。

どうでしょう、このような事が、自然と身に付けば、その人の行動は、より「主体的」「積極的」なものとなるのではないでしょうか。

「求めし所を求めよ」とは、あくまでも、自分が主体的に、それを求めようとする立場に立たなくては叶わないことだと思うのです。

これを実践するのは、中々難しい事だと思いますが、その気持ちだけでも常々もっておかなければと思っておるところです。

そのためには、先ずその「カタ」を作る。呼ばれば「ハイ」です。乱暴な言い方ですが、右でも左でもいいから、先ず「動いてみる」。

これを繰り返すことによって、「カタ」にだんだんと「血」が通うようになり、自分の物、「カタチ」になるのではないのでしょうか。

我々の使命は、惟神の道を、中今の身として、踏み行くことであります。

神代からの、神の道、それを戴く古人、先人の道であります。古人の跡をしつかりと尋ね、その道に立って、御神意を戴く古人の求めしところを求めつづけてゆく、これが神職、

神道人として大事な使命であろうかと思ひます。

このような事を考えます中で、思ひます事は、やはり、私達は全ての事において受け継がれて来たものを、自分の創意工夫はあるものの、その事に習つて生きておるわけでありまして、何ら、「俺がこのことをした」などと言えるものは無いと言つてもよろしいのではないでしょうか。

我々は、今与えられている役割を、今まで申し上げましたように、主体的、積極的に果たしていかなければなりません、それは結局、古人の道を戴いておるお蔭でありまして、それを踏み行ふ神道人としての、その姿勢と態度においては、全く謙虚であらねばならないと思ふのです。

我々が踏み行ふ道が、単なる知識の蓄積だけ、また、経験を重ねただけの結果に終わつてしまつては大変残念な事であらうかと思ふ次第であります。

「先人の求めし所をもとめよ」心がけたい事だと思ふ次第であります。

いろいろと拙い話をいたしました、私が述べました思いなどはどうでもよいのでありまして、是非、「古人の跡を求めず古人の求めし所をもとめよ」この言葉だけをしっかりと記憶に留めていただき、又、皆さまの口から、多くの方にお伝えいただければと思ふ次

第であります。

本日は、講師の先生、また先輩神職の方々が沢山いらっしゃる中で、全く僭越な話であった事とお詫び申し上げる所でございます。何卒お許し頂きたく存じます。

それでは、以上をもちまして私に課せられました役目を終了させていただきたく存じます。ご清聴誠に有難うございました。

感謝とお祓い

小倉雄大

今年の二月、我が家に女の子が生まれ、二児の父親になりました。

一人目の男の子の時はコロナ禍の真っ只中だったため、立ち会うことは叶わず、初めての立ち合いでした。実際の出産の立ち会いは、知識の上でのそれとは大きな差があり、どんな言葉でも言い表せないような大きな感動を受けるとともに、命のありがたみを再確認し、立ち会うことができて良かったと心の底から思いました。

産後、妻と病室にいと先生や看護師の方が立ち代わりで診察に来ました。そのなかで、ある看護師さんが僕の顔を見て、「あんた大丈夫やった？」と尋ねてきました。分娩室での私の青ざめた顔を見て今にも倒れるんじゃないかと心配したそうです。私は声を掛けたり手を握ったりさすったりに一生懸命で、自分がそんな状態にあることは、全く氣付きませんでした。

このようなことは出産の現場ではよくあることで、ひどい場合、立ち会った旦那さんが意識を失って倒れたり、嘔吐したりする人もいるそうで、「あんたはまだマシ」だったそうです。

実はこれは人間の生理現象によるもので、血を見ることで自分の体から出血していると脳が錯覚を起こし、そしてそのまま血を送り続けると大量に失血して命を失う危険性があるため、敢えて血圧を下げ、省エネモードに切り替えるようにできており、その結果、脳に十分な血液が行かず、吐き氣を催したり、失神したりする。さらに男性は狩猟や闘争などでの傷を負う危険が多いため、特にこの働きが強いのだと教えていただきました。

そこで私が長年抱いていたある疑問に答えが出ました。それは、神道ではなぜ出産や血が「穢れ」とされているのかということです。人が人としてこの世に誕生する、人生の中で最も目出度く、素晴らしい出産という出来事。これが「死」に匹敵するほどの穢れであるとされていることを私は納得ができなかったのです。

日本人は古代より、理解の及ばないものや、人智をこえた自然現象に神性を見出し、崇敬し、畏怖しました。これが、古代の神道の起こりでもあります。出産や出血とは、それそのものが死と隣り合わせのものであることはもとより、血を見たときの根源的な恐怖や

嫌悪感、さらにそれを見た第三者が氣を失ってしまうような様子を見て、人智を超えたものを感じとり「穢れ」と定めたのではないかと私は思います。

出産や月経は「穢れ」という考え方により、この期間中は神社や宮中への出入りを禁じられた時代もありました。また血の穢れがあるとされた女性は、その期間に限らず「女性」というだけで立ち入る事の出来ない場所や行事がありました。いわゆる「女人禁制」です。今でも土俵には女性は上がってはならないとされています。

「血＝穢れ」は古来より日本で培われてきた精神文化の一つです。しかしそれを良いことに、社会から女性を排除する動きに利用された事実は確かに存在し、その影響は現代にも色濃く残っています。

「男女共同参画社会」が提唱されて久しく経った現在、様々な場面で女性が活躍しています。

そんな今、巷では「お子持ち様」という言葉を度々耳にします。いかにも前向きでおめでたいような響きの言葉ですが、実はこれは子育てをする親を揶揄する言葉です。特に子

どもの発熱、怪我、看病や、出産、育児等で休暇を取る人、或いは子育てのうえで様々な助けが必要とする人に対して、これを面白く思わない人が、「これだからお子持ち様は…」と皮肉を込めて使う言葉です。

かつてのように直接本人に言わずとも、圧力をかけたり、隅へ追いやったり、SNSに悪口を書き込んだり、もしかすると昔よりも陰湿になっているような気がします。はたして、本当の意味で女性が活躍できる社会になったと言えるでしょうか。

さらにその一方では子供の出生率低下や少子高齢化や国力低下を嘆き、「近頃の若いもんは」という声も聞こえます。

我々日本人の古き良き「思いやり」や「感謝」という豊かな精神性はどこへ行ってしまったのでしょうか。

我々は誰もが、祖先から連綿と受け継がれてきた生命をいただき、母親がおなかを痛めて命がけでこの世に生を授かり、天地大自然、即ち神々からの恵みを戴き、周囲の人々に養い育てられ、今日に至るまでだれかの支えの中で生きています。政治家も経営者もスーパースターもどんな偉大な人も誰かの支え無くして、偉大な功績は成し得ません。感謝し

謙虚な心こそが暮らしを豊かにするのです。

とはいえ、「お母さん産んでくれてありがとう」「神様の恵みにありがとう」と四六時中感謝し続けることはなかなか難しい。ではどうすべきでしょうか。その方法のひとつに、神祀りがあります。

皆さんの身近なところで言えば、神社にお参りをする事や毎日神棚に手を合わせる事です。神前にて「生命・恵みを与えてくださりありがとうございます」と感謝を捧げることで自然と謙虚な気持ちになり、自ずと周りの人々にも感謝できるようになります。

また生きているということは死んでいくということでもあります。誰しも穢れとされる「血」が通っています。女性だけでなくあらゆる人が、日々暮らすなかで穢れにさらされながら、氣付かぬうちに罪を犯しながら、ケガレとハレの繰り返しの中で生きています。穢れ自体は悪いものではありません。それを放っておくことが良くないのです。

今日お集まりいただいたみそぎ修法会にご参加いただく皆さんも、罪穢れを祓い清めることの重要性を良くご存知かと思えます。六月の終わりには夏越の大祓神事が、年末には師走大祓が行われます。それらはとても重要な神事です。

しかし、我々は毎日お風呂に入り体の汚れを落とすように、毎日神棚に手を合わせ、毎日身心の穢れを祓わなければなりません。その際、祓詞を声高らかに奏上するも良し、心の中で念じるも良し。拍手を鳴らすだけでも構いません。とにかく日々清浄を保ち続けることが肝要なのです。

さらに毎朝毎夕手を合わせることで「感謝とお祓い」をルーティーン化することができ、ます。これが日本人の知恵であり、この日々の更新こそが、神道の本質だと私は考えます。

今日家に帰ったらまず家族に感謝を伝えてください。次に家族と一緒に神棚に手を合わせてください。ご自宅に神棚が無い方は、まずは神棚を設けてください。そのうえで、互いの違いを責め合うのではなく、認め合い、補い合い、支え合うことが、老若男女あまねく人々が幸せに生きる秘訣であり、この国の繁栄の鍵となることを私は信じています。

今日みそぎで清めた心身の清浄を保ち続け、感謝と思いやりの真心を絶やすことなく、清々しく健やかにお過ごしいただけることを心よりお祈り申し上げます。

ご清聴ありがとうございます。

(三重県 椿大神社 権禰宜)

すばらしい日本

田 中 淳

本日は、ようこそお参りいただきました。ここから参道を進み本殿へとまいります。

鳥居をくぐり境内に入っていたき何を感じられますか。よく「杜に入ると空気が変わりますね。気持ちが安らぎます。」と言われる方がお見えです。そのような方には、森にお住まいの神様方が歓迎されていることを、お伝えします。

日本の国土は南北に長く、海に囲まれた列島故に、温暖多雨ながら春・夏・秋・冬と四季折々の変化を繰り返す気候です。それと共に育まれる自然の中に精神性を感じ、そして、神様の信仰が結びついています。

古代の人々は、自然を神として崇めたのは、自然が我々の生命いのちをはぐくむ、「親」とみたからにほかなりません。天地間の万物、生きとし生けるものによつて生命を維持している。だからこそ山も川も草木もことごとく神とたたえて、崇めてきたのです。日本人にとつ

て自然は人間によって、征服せられるべきものではなく、限らない恩恵をもたらすものであり、御祖みおやの神様で日本民族の信仰でありました。

例えば山があります。山には山の神が坐すと信仰されます。山を神様として崇めたのです。山へ登ることは山を征服するためではなく、森厳な山にわけ入って神秘を体し、その山に坐す神様の靈氣を受けて、自らの靈力を強めようとの信仰でした。また、山の樹木を伐るにも、定めがありました。

山は人々の衣・食・住など生活をささえてくれる、生命みなもとの源であつたからです。降る雨を山は蓄えます。山を源とする水は、田に水をもたらし、稲を育て私たちに「いのち」をつないでいただけます。

山に対する畏敬の念は、樹木の伐採にも自然のルールを感じて行っていました。自然を無視するような必要以上の伐採は、時に大きな災害をもたらし、山を崩し、田畑を埋め、人命を奪つたのです。そして、古代の人たちはこのような自然をもつて「神様」として仰ぎ、時にお社をお祀りしたのです。

このような教えについて、近世の神道家である 若林強斎わかばやしきやうさいは「およそ有る御事なれとも、神道のあらましを申し奉らば、水をひとつ汲むといふとも、水には水の神靈がましますゆ

へ、あれあそこに水の神・ミズハノメさまが御座なされて、あだおろそかならぬこととおもひ、火をひとつとすといふても、あれあそこに火の神・カグツチさまが御座なさるるゆえ大事の事とおもひ、わずかに木一本用ゆるも、ククノチさまが御座なさるるもの、草一本でも、カヤノヒメさまが御座なさるるものと、何につけかにつけ、触るる処、まじはる処、あれあそこに在りますと、戴きまつり、崇めたてまつりて、やれ大事とおそれつつしむが神道にて、……」（かういふなりがすなわち常住の工夫ともなりたるものなり）」と記しています。

※少し引用を長く語りましたが

我々の生活に欠くことのできない全てのものは神様のお働きであり、恩恵に感謝し、その働きを、かしこみ慎しむ日々があるのです。このことは、私たちに「いのち」をいただくことで、いのちの連続を大事とする、神道の根源であると思います。

皆さんは、参道の中程にある絵馬形をした看板をご覧いただいた事と思います。

看板に元号令和六年、皇紀二千六百八十四年と記してあります。

ご存知だと思いますが皇紀は、第一代神武天皇が橿原の宮で御即位されてより、第

一二六代今上陛下に至るまでの建国の年数です。皇室は永きに渡り万世一系にて続いております。西暦で二千二十四年ですから、世界に類を見ない長き歴史です。

爾来、天皇は国民を「おおみたから」と据え、安寧と幸せ、日本の国の平和をお祈りいただいております。そのことは、平成二十三年東日本大震災、本年正月能登半島地震や大きな災害の折りには、陛下は、いち早く被害を受けられた皆さんの下にお出ましになり、同じ高さの目線にてお話をうかがい、災害対応の皆様には労をねぎらうなど、親身に献身的に優しく接するお姿に、皆安堵と安らぎそして勇氣をいただけるのです。陛下は常に私たち国民に寄り添い、真心をお捧げいただいているのです。大変尊いことであります。

このように日本の国は、八百万の神様に守られ、陛下より真心をいただける、すばらしい国柄なのです。

私たちは、今生活は進化し、便利で不自由なく日々を送っております。今日のご参拝で、日本人が長きに亘りかがふる神の恵みを少しでも感じていただければ幸いです。

それでは、続きまして本殿でのご祈禱に御案内いたします。

(三重県 椿大神社 禰宜)

憧れの鯛

岡田 順

遠き昔より日本列島は火山の噴火や地震、それに伴う津波等、多くの災害に遭ってきました。しかし、この国の民は、この災害を誰かの責任とは考えず、災害がこれ以上起こらないようにと、神々に祈りを捧げてきました。

祈るときには祭壇を設けて、神様にお米やお酒、海の物、山の物など、お供えをします。その中には、鯛が使われています。なぜ、鯛は多く神事でお供えされるのでしょうか。

先日、地鎮祭の依頼がありました。福山市北部の産業団地の整備が終わり、最初の企業の工場が建築されることに決定したのです。工場では船の部品を製造します。

地鎮祭の当日、私がお供え物の準備をしている所へ、この鯛を使ってくださいと木箱が置かれました。箱を開けて、目にとび込んできた鯛を見て、私はわくわくしてしまいました。

た。その鯛は美しい桜色で頭から背にかけて厚みがあり、目は青色に輝いていました。神経ジメの跡があり、これはプロの仕事だと思ったからです。

私は料理人です。神主になるよりずっと前から料理を業として生きてきました。包丁一本あればなんとかなるという気持ちは、今でも変わりません。そして美しい鯛を手にしたら、たまりません。お刺身はもちろん、湯引きにも、焼物にも、アラ焼きにも吸物にも、ご飯にも、なんでも美味しくしてくれるのですから。

皆様は、ご存知でしょうか。採れたての魚は美味しくありません。身が筋肉質で、包丁は入りにくいし、たとえ口に入れてもブリブリ跳ね返ってしまいます。焼いても身がそり返り、形が定まらないのです。

料理とは、料（ことわり）を理（はかる）ことです。

料理人は、素材をどのように味つけするか、どのタイミングで食べてもらうかはかる技をもっているのです。神経メに活けメを施し、熟成させることで、筋肉質の魚の身を旨味に変えることができます。

さて、このお供えされた美しい鯛は私にたくさん事を伝えてくれたのです。

魚篇に周ると書く『鯛』は、日本列島一周どこでも生息できる事を意味しています。更に鯛は、日本の海岸、ギザギザした瀬戸や灘に生息します。ギザギザした海底は潮流により砂が酸素を含み堆積し、そこにエビやカニが湧くように発生し集まり、それを大好物に食べているのです。

あの鯛の美しい赤色は、エビやカニに含まれるアスタキサンチンの成分によるものなのです。

このアスタキサンチンを含むエビやカニは、山から川へ、川から海へと流れる軟水の栄養が海に流れ込む事によって、海の水質が多くのプランクトンを生み出すことにより生成されているのです。

桜色の美しい鯛は、豊かな山と海により育まれている奇跡なのです。その鯛を陸の神様にお供えし、喜んでいただき、御神徳をいただくこと。ここには繋がりがあなのです。

この海の蒸気が雨となり山へと降り注ぎ、川へと、そして海へと繋がる循環。

この営みこそ、神々が創りたもうた、日本列島なんです。

私は、この様な鯛を自分で釣り上げた事がありません。釣り上げてみたいなあ、と思い

ます。エビを釣針に付けても、鯛は目が良く、中々喰いついてくれません。また、喰いついても強い歯と顎で噛み切ってしまうでしょう。

もし、憧れの鯛を私が釣り上げたならば、まず御神前にお供えます。

この鯛をもたらしてくれた、山の神さま、川の神さま、海の神さまに心より感謝をささげます。また、この様な大地をもたらしてくれた神さまに感謝します。そして、この美しい循環がずっと続きますようにと願います。そして、最大限の旨味を引き出していただきたいです。

最後にもうひとつ加えさせていただきます。最も美味しい鯛が生息しているのは、オノコロ、オノコロと神様がまず最初に作られた淡路島、明石海峡付近だそうです。神様はちゃんと知っていたんですね。

これで、あんたい。

終

氏子について

永代優仁

本日はようこそお参りいただきありがとうございます。

妻山神社禰宜の永代優仁です。みなさまに本日お伝えしたいこととお願ひしたいことがございます。この妻山神社はどのようにして護られてきているかご存知でしょうか？

宮司の個人的財産？それとも大金持ちの多額の寄付？それとも町がお金出してる？それとも参拝者のお賽銭？どれでしょうか？実は、それは妻山神社がある須古という地域に住んでいる氏子さんと言われている人たちによつて護られています。え、誰それ？と感じてすよね？そういう名前の人がいっぱいいるの？という感じかもしれません。この氏子さんはあなた方みなさんのことを言ってます。え、どういふこと？と思うかもしれません。氏子とは、この須古に住んでいる人みんなのことを指しています、今日ご参拝していただいたあなた方も妻山神社の氏子さんになります。そもそも氏子っていうのを漢字で書くと、

氏名の氏、に子供の子って書きます。ちなみにこの妻山神社のことをこの地域の氏神神社という言い方もしたりします。もうわけわからんでしょ？氏神は氏名の氏に神様の神を合わせて氏神って書きます。なので、氏子というのがこの氏神神社である妻山神社の子供ということになるんですよ。その神様の子は、妻山神社の神様に護ってもらっています。何を？それは日々の穏やかな平穏やこの地域が災害等起きないように神様がみなさんをお護りしていただいているということになります。その氏子さんの中には実はリーダーがいるんです。そのリーダーは氏子総代と言ってどのように書くかというと、総代の総は総合の総と書いて代は日本代表の代とかいて、氏子総代と言います。この氏子総代は氏子のリーダーなので須古地域の各部落ごとに氏子さんのまとめ役だったり、神社のお祭り事のお手伝いをしたりする、より神様に近い人たちがいるんです。例えば、お神輿が出る年に一番大きなお祭りの準備や神社の神事と言われることに携わったりしている人たちです。わけわかんなくなる前にもう一度おさらいしますね！キーワードは3つ。氏子、氏神神社、氏子総代。氏子は須古に住んでいる人たち、氏神神社はこの妻山神社、氏子総代は氏子の代表、頭に入りましたか？で、最初に話を戻すと、みなさまにお伝えしたいこと、お願いしたいことがありますと言いましたね。

今度はお願いの話です。実はこの須古地域はこの先、消滅可能性地域に指定されています。ガーンでしょ！なくなるんです。須古小学校は六年後の令和十二年に統廃合されなくなります。今ですら一クラス十数人のクラスで全校生徒百人切りました。須古は今七百世帯、千八百人程度の人口で、ポリウムゾーンは六十代から七十代が一番多いです。いわゆる少子高齢化地域で、国とか行政の言い方ですと過疎地域という言い方をします。この過疎地域にあたる神社は神社界からそもそも存続が難しいと言われています。なぜなら氏神神社を護っている人たちは氏子さんなのでその氏さんは須古に住んでいる人なので、人口が減るとその氏子さんも減って氏さんがいなくなると妻山神社はなくなります。

でもですね、私はこの神社が好きです。生まれ育った神社でもありますし、ここまで生きてこれまでの人生を歩めたのも妻山神社のお蔭様だと思っています。なので、私はこの妻山神社を次の世代にまたさらに次の世代に繋ぎたいと思っています。妻山神社ではこの地域が活性化するために氏子さんと一緒に子供が子供たちのお祭りを新しく作りました。須古に住まれているので知っているかもしれないませんが、須古小学校の児童が実行委員となり、須古がある白石町の中学校、高校生を巻き込んでお祭りすること。これは二年行っていて、今年で三年目になります。毎年五百人程度子供やその親が昔ながらの遊びを体験し

たり、おじいちゃんおばあちゃんと一緒にその道具を作ったりして子供たちに妻山神社で何かやったという思い出を作っています。

これは大人になって、私みたいに地元に戻ってきた時に、その子らが地元のために動いてくれるのを期待しているからです。また新たに芸術祭という町レベルでアートを通して街を周遊してもらうために妻山神社の舞台にアート作品を展示して地域外の人たちも知ってもらうために行っています。

話が戻るんですが、なんで行っているかという一言で言うとう妻山神社とこの地域は危機に直面しています。先人たちが篤い崇敬を持ってこの神社をお護りし引き継いでくれた神社です。氏子であるあなた方が、日々の祈り、人生儀礼などの初宮、七五三祈願、成人式、厄年、還暦などの御祈禱に来ていただくことだけでも、妻山神社をつなぐ一助となります。ぜひ今日の機会に妻山神社の氏子さんなんだという認識と、妻山神社我々神職とあなた方氏子さんと一緒に次世代に繋ぐために妻山神社をお護りしていただければ幸いです。

本日はご参拝またお願い等聞いていただきありがとうございます。

対象者…二十代若者、氏子という言葉を知らない人たちに向けて

三大神勅

宮崎貞臣

令和六年は、元日より能登半島の地震で始まり、暗いニュースが沢山流れる中、日本人としては、次世代のヒーロー大谷翔平選手のような素晴らしい方の活躍が見られるように、暗い話ばかりではありません。

さて、私にとつては、今年四十代最後の年です。ただ今、四十九歳。寅年です。今回、四十代最後の年に講演の演題に掲げさせていただきましたのは、

高祖 天照大神

「三つの神勅を子孫に授けたまう。」

三大神勅を選ばさせて、頂きました。

三大神勅は、天から降った天孫瓊瓊杵尊より現在に至るまで天皇と国民のこころの架け橋として共に受け継がれてきました。

天壤無窮乃神勅

「葦原千五百秋之瑞穗國、是吾子孫可王之地也。宜爾皇孫、就而治焉。行矣。寶祚之隆、當與天壤無窮者矣。」

日本は、わたしの子孫が天皇となる国です。その皇位は天地とともに永遠に栄えることでしょう。

令和元年五月新帝陛下はご即位され、秋の即位礼をもって皇位を受け継がれたことは、天孫瓊瓊杵尊に神勅が授けられてより今に至るまで代々大神の子孫がその皇統を受けつくだ何物にも変えることのない真実です。

ある、偉い方が、病室で最後に残したお言葉を紹介します。

「日本の天子様は、この天地間にありとある神様中の総親神様じゃ。この世界中のありとあらゆる神仏の総本家が日本の皇室じゃ」

うつくしいお言葉です。

日本人は、イスラム教の様に一日に何回もお祈りをしないとイケない神様ではありません。ん。

厳しい神様ではないので、神様の存在に気づかずに過ごすことが多い中、先生達のように万物の神髄に到達された人々は、昨今ではごくわずかの人数です。この僅かの人々が世の中を動かしてきた史実。この僅かの人々により守られてきたことは、神の力でありここに、神道人が生きる生き方が秘められています。

神道とは何かと問われた時は、「天皇教」です。と即答できるよう神主は、何をするにも心にもって生きていきましよう。

しつこいようですが、神道は天皇です。

私たちがやるべきことは、天皇の大御心をわかりやすくやさしくうつくしいものをうつくしく一人でも多くの国民に伝えること。

それが、神主の職務です。

宝鏡奉斎の神勅

この鏡を私だと思い大切に祭りなさい。

「吾兒、視此寶鏡、當猶視吾。可與同床共殿、以爲齋鏡。」

鏡は天皇に受け継がれたのですから伊勢神宮の鏡の持ち主は天皇であります。

なので、伊勢神宮は、一宗教法人（解散有）ではあつてはならないのです。

伊勢神宮は日本国のこのころのふるさとです。

同時に人類の宝です。

しかし、現実はどうでしょう？宗教法人なるあとづけ法に当てはめてはいけなと思います。先輩諸兄は、制度是正問題に言及しています。

例えるならば、会社組織の中で、社長の意見よりも、社長からお給料をいただいて生計を立てている従業員の意見の方が通っている様な状態です。

よく日本は、法治国家。法律に守られていると言われる方がおられますが、法律は、事件、事故、のつとり、紛争等々が起きてからその事例に照らし合わせて、今後このようなことが二度と起こらないようにと様々な角度から協議して出来上がるのです。

しかし、世界中で起きている戦争がわかりやすい事案ですが、どんなに、国際法、国際的取決めをしても、現実には世界の国々は、戦争をやめません。

伊勢神宮が「かいさん」するわけがないと思っっている神主諸君。今の神社本庁の姿がこれから先の姿をさしめしめしているとおもいませんか？

恐れ多くも、天皇陛下にお伝え出来きるのであれば、皇室の財産として本来の神宮の姿

に戻して十年後の遷宮を私たちの代に迎えられればいいのにと…自分の力のなさを改めて感じます。

斎庭稲穂の神勅

わたしが、高天原で育てた神聖な稲穂をあなたに授けましょう。

「以吾高天原所御齋庭之穂、亦當御於吾兒」

瓊瓊杵尊は高千穂に天孫降臨されたときに天照大神からいただいた稲穂を持参して地上におりたつた。

日本は神話と現在が、連綿と繋がってきた国柄です。稲は三千年からなる連作で繋がってきました。

瓊瓊杵尊がいただいた稲穂が、令和の今も新帝陛下が吹き上げ御苑でお田植遊ばされる事実をもってこれが、日本の宝であることを、広く日本国民に分かりやすく知らしめ伝えることが、わたくしたちの務めではなからうか。

たとえば、伊勢神宮に氏子さん総代さんにご参拝の時には、御かげうち特別参拝、大大神楽の奉納も素晴らしい事です、神宮徴古館にも立ち寄られて下さい。

そして、農業館には本物の稲穂が展示してありますので、実際に見て、自分の目で確かめてもらった方がいいでしょう。

その稲穂、展示してある物こそ天皇の「宝」

天皇が天皇である神髄であることがわかることでしょう。

結びに

人間の生き方として一番大切に忘れてはいけないことは、石井寿夫先生のお言葉をかりれば、人間が天地のいとなみを畏敬して、「宇宙の意志」とかしこむと、みずからもまた、その実現を手助けしようとせねばならぬとけなげに決意せずにおれない。

神社人が前向きの創造や開拓をわが任ではないと無視しがちなのは、「天つ神の事よさし」の真義が十分にわかっていないからである。

世界の平和。人々の福祉のために力を尽くすこと。

神の道は、自分の全身全霊をかけて天皇陛下をいただくうるわしき日本。そして世界中の人々がこころ安らかに暮らせる様な世の中の修理固成に自ら加わり生きていくことを目標におき、一日一日を大切に過ごし、家族や親愛なる人を大切に思うところ。

他人をうやまい、自分自身のことをたくさん愛し、人には優しく、時には、最愛の人を守るためには毅然とした態度でのぞみ、立ち向かい、たじろかず、自然を愛し、自分自身も自然のいちぶであることを常に自覚して生きていくことが、神さまが記してくれた人の道でありましょう。

いっしょにがんばりましょう。

ご清聴ありがとうございました。

(福岡県 三島神社 宮司)

神社・神道の裾野を拡げる

小山手公平

「神道学科」……じんどうがつか？

これが私の神道との出会いである。

皇學館大学精華寮では、毎年入寮してきた生徒が食堂で出身地、学科、名前を食堂にて先輩等の前で宣言する伝統がある。その折に私は「しんとう」に出会った。

本研修では、私の出自と神職を志した理由、住吉大社が行っている裾野を拡げる活動の三つについてお話していきたいと思う。

私は小山手という苗字で恐らく殆どの方が見た事のない苗字であろう。小山手とは奈良県吉野郡十津川村にある字の一つであり、恐らくこの字が私の苗字の由来である。十津川村は、私の田舎であり、二つの意味をもつ。鉄道はおろかコンビニ一つない村である。村の面積はというと、北方領土を除き日本で一番広く、面積は東京二十三区や琵琶湖と匹敵

する。人口は三千人未満であり、一千万人近い二十三区と比較すれば歴然である。そんな十津川村は古来より皇室と縁の深い村で、十津川郷士と呼ばれ、様々な戦乱で活躍したとされる。ここまで十津川村の歴史や地理を偉そうに述べてきたが、私自身居住経験がない。と申しますと私の父は全国転勤の多いサラリーマンで、幼少期より転々としており、幼稚園小学校共に三校ずつといった所謂転勤族であった。歳を重ねてわかりましたが、父の仕事の出来によるもんだったんだなど（笑）

ここまで長々と私の出自についてお話ししてきたが、そんな私が何故神職を志したのだろうか。それは、「幼い頃転々とする中で各地域の特色ある神社に興味をもったためである。」という風な文言を常套句として用いてきた。

嘘ではないが、それが大きな要因となり神職を志したかというところ……である。私が神職を志したのは大学入学後である。三年前に皇學館大学を卒業し、住吉大社に奉職させていだきました。大先輩方を前にして言うのは憚りますが、正直に申しますと神職になりました！と思って皇學館大学に入学したわけではありません。入学した経緯は、出来の悪い私を見かねた父が神道を学んでまともな人間になれといったことで嫌々皇學館大学に精華寮に送り込まれた訳であります。そんな私は当時、神社や寺の違いはおろか神道を「じんど

う」と読むほど無学で無知な人間でありました。「じんどう」のくだりは、序盤の入寮で的一幕である。振り返ると嫌々入学した皇學館大学が精華寮がとても充実した日々であった。今では皇學館大学のOB組織館友会の大阪府支部の事務局員をさせていただいたり、皇學館大学広報誌等に何度か紹介いただいた。卒業してみると素晴らしい大学であったと思ひ感じる。

それではいつ神職を志したかと申しますと、二つきっかけがありました。

一つ目は富士山頂上をはじめ多くの神社実習奉仕をさせていただいたことです。

実習や奉仕という現場を知る機会つてとても良くてですね。皆さんも日々感じておられるとは思いますが、一心に願われる参拝者の方を拝見しますと、素敵な仕事は世の中にありふれているけれど、こんなにも尊い職業としてある神職、神主さんて素晴らしいなと思ったのが一つのきっかけです。

二つ目のきっかけは、大学入学後に帰省した折に曾祖父の話聞いた事です。神社や神道に交わる経験がなかった私ですが、曾祖父や親戚は十津川村で神職をしておりました。そんな曾祖父は約五十年前にこの世をさりました。祖父や父も役場で奉仕していますが、お世話になっていますといった形式的な挨拶はされるものの、あんなにいい人はいないと

言った言い方をされたり感謝をされるといった経験はありません。その話を聞いた際に曾祖父のような、寛大な人間になりたいと思ったのが神職を志した理由の二つ目です。

次に住吉大社が行っている裾野を拡げる活動についてご紹介いたします。岡権宮司が行っている「かかしプロジェクト」です。この活動は住吉大社近隣の幼稚園保育園小学校をターゲットにした活動で、都市部在住の児童に稲作体験や食育の機会を提供するプロジェクトです。昨年度は八小学校三幼稚園三保育園一高校計八九三名に携わったプロジェクトとなっており、本年度で十二年目を迎え、総勢八千人超のプロジェクトとなっております。

昨年私もこのプロジェクトを行っている岡権宮司に同行し、公立の小学校に行って参りました。その小学校は校庭に田んぼを設けて小学四年時にはかかしづくり体験。小学五年次には稲作を体験するといったカリキュラムが組まれています。小学校に訪れて廃材を用い、カカシを作成していた訳ですが、子供たちの無邪気な表情にこちらが清々しくなるほどの素晴らしい体験をさせていただきました。子供達のかかしをつくるのに必至で恐らく我々が神職である事は忘れてゐる。こういった経験が将来の崇敬者を育てていくのではないかと私は思う。

長々と私の出自等をお話しさせていただきましたが、端的に申しますと若い世代で、本当に何も知らなかった私が神職って神道って神社って素晴らしいな尊いなと思えたからこそ、神道、神社に対して接せる機会のない方々に同じ目線、近い目線で接するがでできると思う。この目線を活かし様々な方に「しんとう」をお伝えできるよう邁進していきたい。

(大阪府 住吉大社 権禰宜)

神との対話

村上 浩基

こんにちは。

とつぜんですが、皆さんは神様とお話したことがありますか？

もし話すことができたなら、どんなことを聞きたいですか？

いつ宇宙がはじまったのか？どこまで、宇宙はあるのか？私はどうして存在して、なんのために生きているのか？気になったことはないでしょうか。

私は頭が理系なので、古事記を始めて読んだとき、天照大御神が天の岩戸に閉じこもったというお話を聞いたときに、「女の人はどうやってそんな大きい石を動かしたの？」という風に「どうして？なんで？」と考えたことが一つ二つではありません。

この神様がいったいどんな理由で、何を意味しているのか？と、考えても答えなどある

はずもないのに、納得できずに眠れない夜を過ごしたことがあります。

最近ではビッグバン、約百五十億年前に起こった大爆発で宇宙が誕生したと言われているかもしれませんが、昔の人が考えていることを最先端の科学で読み解こうとしても、なかなか納得できないことが沢山あるように思います。

本日は自分がそんな風にあれこれ考えていたとき、ふと気付きの切っ掛けとなりました、「神との対話 (Conversations with God)」という本を紹介したいと思います。

この「神との対話」という本は、アメリカ人作者のニール・ドナルド・ウォルシュが神に聞いた問いと、神から得た回答という、いわば作者と神との一対一の対話形式で書かれたというユニークな構成となっておりまして、一九九五年に出版されてから世界三十七の国や地域で翻訳され、日本では百五十万部ほどの売り上げを挙げた大ベストセラーとなっています。

私の住んでいる山口県では人口が百三十万人弱でございますので、二十年前の本と考えますと改めてその凄さが分かると思います。

このウォルシュという作家は、もともと父の後を継いで、神父になることが子供の頃からの夢でありました。ところが周囲の反対もあって、それは叶わずに若い頃から様々な仕

事を転々として、自分の人生は不幸だ、失敗だと日々嘆いて生活していたそうです。

そんな彼は自暴自棄になると、ストレスを解消させるためにいつも「宛先のない手紙を書く」という習慣がありました。若い人がSNSに愚痴を載せるのと根っこは似ているのかもしれない。

しかし誰かが手紙を読んで、悩みを解決してくれるわけもなく、ウォルシュは日に日に不満ばかりが貯まっていきます。そしてある日、人生に行き詰まり、なぜ自分がこれほどまでに苦しく、なぜここまで辛い思いをしなければならないのかと、とうとう不満を爆発させてしまいます。

いつも通りに手紙に不満をぶちまけるウォルシュですが、その日の彼はたった一つだけ、それまでと違うことをしたんですね。

それは何かと申しますと、それまでは自分を苦しめている相手や社会に宛てて手紙を送っていたのですが、この日の彼はもつと奥にある根源、つまり「神に宛てた手紙」を書いたのです。

そして行く当てのない質問を書き終えて、ペンを放り投げようとした、その瞬間、不思議

議なことには彼の手は見えない力で押さえつけられているように、手紙の上で金縛りに遭ったそうです。

ウォルシュが暫くペンの動くままに任せると「あなたはほんとうに、すべての質問の答えを知りたいのか。それとも八つ当たりをしてみただけなのか？」との返事が来たそうです。

苦悩に満ちていたウォルシュは直ぐさま答えます「たしかに八つ当たりした面もあるが、答えがあるなら、絶対に知りたい」と。

本書はここから始まります。

私がこの本を手にとったとき、始めはキリスト教の教典書なのかと思っていたのですが、ウォルシュとの対話にあらわれた神の性格は、何かを人間に要求して、裁くような神というよりも、ユーモアに溢れ、人格的で八百万の神の姿に近く、どこか日本的で面白いなど感じました。

内容を全て紹介しますと時間を大幅に取ってしまいますので、本日は私が始めに話しました「宇宙の根源となる存在」に関わる部分のさわりだけ紹介したいと思います。

さてウォルシュは神にこう問いました「宇宙はなんのために存在し、私は何のためにこ

の世に生きているのですか？」と。

それになりたいして神は言葉にすると誤解を生みやすい、という前置きをした上でこう答えます。「自分が何者であるかを思い出すため、そして創りなおすためだ」と。

そして神は続けて答えます。「簡単に言えば、背が低いということを知らなければ、背が高いということはわからない。左と右、上と下、大と小、男と女、自分自身を知るためには、自分でないものと対決しなければならぬ。これが全ての生命の目的なのだ」と。

つまりとところ、自分が何者であるか？ということを読み出すためには、自分以外の何かを知らなければその概念を理解できないということです。

物理学的に言えばアインシュタインで有名な「相対性理論」と言われます。相対性とは他の対象との関係の上で存在する、持ちつ持たれつの陰陽の関係であるということです。

皆さん、この中で兄弟姉妹がおられる方いらっしゃると思います。ではお聞きしますが、お兄さんと弟、先に生まれたのはどちらでしょうか？当たり前前のことを聞くんじゃないよ、と思われるかもしれませんが、しかし相対性の概念から考えれば、実は兄と弟というのは「同時」に生まれているんですね。

なぜならお兄さんだけでなく兄弟という関係はあり得ません。弟さんが生まれるまでは一

人っ子です。夫婦や親子に関してもそうです。兄が生まれて弟が生まれる。二人生まれて初めて兄弟という相対性による概念が成り立つわけです。

神道では「浄・明・正・直」という言葉があります。清く、明るく、正しく、直くという概念ですが私はその相対的に位置するのが「罪穢れ」であると考えております。しかしながら、日本の総氏神様ともいわれる天照大御神、そして須佐之男命、どちらも有名な神様ですが、皆さんこの神様はどこから生まれたかご存じでしょうか？

古事記によりますと、伊邪那岐命が死者の国である黄泉国から帰られたときにお身体に付いた穢れを川で濯いだとき、その目と鼻から生まれたのがこの神様なんです。日本で最も有名な神様は実は穢れから生まれたということは、実に面白い話だと思いませんか？

よく考えてみて下さい。もし部屋に埃一つも汚れが全く無かったら、まず掃除をしようという発想が浮かばないと思います。「罪穢れ」という概念があるからこそ「浄・明・正・直」という相対した考えが生まれるのかもしれないですね。

そういえば神社では鏡を本殿にお祀りしているところが多いです。熱田神宮に祀られております三種の神器の八咫鏡もそうですね。鏡は姿見とも言いますが、自身の靈魂を映し出す神器とされています。鏡を祀ることで自分自身と向き合う、まさに我を写す神であつ

て、相対的な概念を思い出すという象徴であると言えるかもしれません。

さらに神はウォルシュの苦悩に対してこう告げます。「あなた方は、自分なりの理由で、その結果を不運と呼ぶかもしれない。だが、どちらの道を選ぶかは自由であって、魂の課題と言う点から考えれば、不運でも悪いことでもない。間違いは、それを選んだことではなくて、それを悪と呼ぶことである。それを悪と呼べば、創造した自分を悪と呼ぶことになる。あなた方は集団として、また個人として、自分たちの人生と時を創造している。そして自己の概念が体験となり、新たな存在を知ることと成長することができ」としています。

つまり悪という概念も、自分の心の鏡が映し出した相対的なものであって、これを滅ぼそうと戦えば結局、神の一部である自分自身の身を削ることになります。これは敵と戦おうとするキリスト教圏と日本の宗教観との根本的な違いともいえるかもしれません。

「人生は自分を思い出す旅である」

新たな概念に気がついたとき、何を選択するかが大切であると思います。本日は何かの気付きとなればと「神との対話」のご紹介からお話をさせていただきました。ぜひ後悔の

ない人生を送って欲しいと思います。ご清聴頂きありがとうございました。

(山口県 花岡八幡宮 榎宜)

初宮詣にて（初めて親になられた方へ）

中山直紀

最近憂いでいることがあります。それは子供たちの礼儀のなさ。

先生や親に対する尊敬が欠如していると感じてやみません。結果、敬語を使えない社会人が増えてきています。言葉を知らないし、出てこないのです。

そこで私からお願いします。

家族であつてもきちんと挨拶と感謝をしましょう。

「おはようございます」「おやすみなさい」「いつてきます」「いただきます」「ごちそうさまでした」

当たり前のことですが、その当たり前ができない子供たちであふれかえっています。挨拶はコミュニケーションの第一歩です。互いの状態を知るきっかけです。

そして感謝です。感謝をしましょう。

夫婦間で自分ができないことをしてくれていることに感謝です。

自分がしていることに対して感謝など求めてはいけません。

ただ相手がしてくれたことに感謝しましょう。

ささいなことでも感謝、配膳してくれて・洗濯してくれて・片付けてくれて。「ありがとう」と何度でも口にしましょう。恥ずかしがることはありません。

だけど、感謝は言葉だけでもいけません。

子供の面倒をみれるのは母親だけでしょうか。いや、男にもできることはあります。

自分は料理ができないなら、せめて洗濯と掃除と風呂の準備は自分がする。

子供に食べさせることができないなら、せめてお風呂にはいれてあげる。

いわれてではなく率先して行う。そして決して見返りを求めず、ただただ相手のしてくれたことに感謝をする。

それをお互いができるなら、互いが感謝を忘れなくなります。

そんなお互いを認め合い尊重しあう姿を子供に見せつつづければ、支え合い感謝しあうことが当たり前と認識し成長してくれます。

本日、お宮参りをされて、大神様に感謝申し上げました。母子ともに無事で出産を終え

られたこと、それは誕生の瞬間のことだけではありません。自分が生まれ、パートナーが生まれ、何十億もの人類の中から出会い、そして命を頂くに至った。それはまさに人知を超えた無数の力があつたからと思いませんか？ なにか一つでも狂えば今はなかったはずです。

そんなきつと誰かあるいは何かのおかげで起こりえたことへ感謝したいという日本人の思いが、神社を生み出しました。神社とは感謝が作り出した感謝の結晶です。

このような日本人らしい心を、お子さんに是非伝えていつてあげるためにも、親しき仲にも礼儀あり。いただきます・ごちそうさま・ありがとうございますを欠かさず、そして言葉だけでなく行動でも感謝を行ってください。

最後に、私の妻からお父さんをお願いを言付かっております。奥さんを眠らせてあげてください。週に四日、無理なら三日、最悪二日でもかまいません。眠いと思考力と集中力が失われます。そこに子供のトラブルが多々舞い込んできます。ストレスが健常時とは比較にならないくらい跳ね上がります。なので、どうか奥さんを眠らせてあげてください。そして私から、奥さんの力になってあげてください。働いて稼いできているから疲れている、というのは男のいいわけです。女性は自分と子供の二つの命を支えています。女性が

家を守るのは当たり前などという時代そのものが間違っています。そんな昭和な考えを持っている男性が今もいます。ほかは古くさいとかいいながら、自分の都合のよいところで古き良き文化などと口にする方がいます。逆であることを自覚してください。男が働くのは当たり前。その思いで、家に帰ったら可能な限り家のことを家族のためにしましょう。疲れているのは自分だけとは決して思わないように。奥さんは自分よりずっと疲れている。その気持ちがあれば、きつとみんなが優しい気持ちになりますよ。

(兵庫県 駒林神社 宮司)

神職は安国を目指す――大祓詞より――

熊谷 昭

世界では、今も戦争が行われています。中でも、大きなものは、皆さんご存知の、ウクライナとガザです。この両方で、大きな力を持つものが、力を持たないものを攻撃しています。また、一部では虐殺に近い事が行われており、先進国の中にはその虐殺を積極的に黙認している国があります。残念な事に日本ではその現状が大きく報道される事はなく、その為、日本ではこれらの戦争の意味があまり理解されていないという現状があります。

このような戦争の現場から、遠く離れた東アジアの片隅、この日本で、私達神職はどのように日々を過ごして行けば良いのでしょうか？今日は、それをみなさんと一緒に、少しだけ考えてみたいと思い、「大祓詞」というものをご紹介しますながら、お話してみようと思います。

大祓詞というのは祝詞というものの一つです。神社に行くと神主さんがなにか唱えてい

ますよね。あれが祝詞と言われているものなのです。例えば、七五三で神社に行くと、神主さんが祝詞でお子さんと家族の未来が幸せでありますようにと神様をお願いをお伝えしてくれます。神様にお願いを聞き届けて頂く為には、丁寧で雅な言葉でお伝えするのが大切だと言われていますので、やまとことばの持つ日本語 本来の美しさが祝詞の特徴となります。

さて、その祝詞の中で最も有名なのがこの大祓詞なのですが、元は平安時代に編纂された『延喜式』巻第八（祝詞式）に「六月晦大祓」として記載されています。六月の晦日と十二月の大晦日の半年に一度、朱雀門に集合した朝廷の官吏達の積り積もった罪を祓い除く為に用いられました。その後、大祓詞は時代時代に、色々な人が研究し、活用して、広く一般に普及して行きました。今では日本全国の神社で毎日この祝詞が大切に奏上されています。

では、この日本一メジャーな祝詞、大祓詞にはどんな事が書かれているのでしょうか？神道に関わる私達の立場で言えば、神道の大前提が書かれている、とも言われているんですが、今日は、その中から一つだけ、「安国」という言葉に注目してみようと思います。というのも、大祓詞には、「安国」という言葉が三回も出て来るのです。ヤスクニ、聞いた

ことありますよね。そうです、あの靖国神社のヤスクニです。音読みするとアンコクと読めてしまうので、漢字を変えたんだそうですよ。

「安国」はまず、大祓詞の最初の段に「安国と平けく知ろしめせ」と出てきます。前後含めて、簡単に、現代語訳をつけるとすれば、『御祖神が、天孫・瓊瓊杵尊に、葦原の瑞穂の国である日本を、「安らかな国として、平穩に治めなさい」と委任された』などのようになるかと思います。

神道に「高天原」という言葉があります。高天原は天上にあつて、天照大神を始め天つ神がいらつしやる神の世界です。高天原は何事も集議によつて決められる泰平の世界であり、誰もが、心穩かで、情深く、平和で、豊かな、日本人が思い描いてきた理想の世界、日本人の規範となる世界です。「安国」とは、この高天原のような世界の事を言います。「平けく」とは、平穩、平和、平等などを意味しますが、親が子に抱くような、どの子に対しても別け隔てなく、無条件に、平等に愛する、というようなニュアンスでしょう。「知らず」とは、王道、つまり、高い徳を持つて統治する事をいいます。シラスの対義語はウシハク。王道に対して覇道を意味します。覇道とは力や暴力、それによつて得た権力や財力による支配の世界です。

まとめますと、皇御孫・瓊杵尊は、この地上に、「安国」という高天原と同じように平和で、平穏で、平等で、皆が豊かである世界を、暴力を使わずに平和な方法で、高い徳を以て、創り治めなさい。という使命を持って地上に降臨なされたのです。これを天孫降臨と言います。

その瓊杵尊のうみのこ、血縁のご子孫であらせられる歴代の天皇陛下は、毎日欠かすことなく、自ら、地上の「安国」化の実現、つまり、世界の平和を祈りつづけておられます。

これは、時代が変わっても、法律が変わっても、決して変わる事はありません。

神道では、神武天皇の詔勅から、天皇のこのようなご使命を、私達、国民が、しっかりと理解した上で、天皇をご支援して、共に、安国の実現を目指していく、という相互扶助の関係が、理想の国の形だと考えられています。

ちなみに、「敬神生活の綱領」にも、「太平を開く」「世界の共存共栄」という表現が出てきますね。余談ですが、「敬神生活の綱領」作成の中心人物であった小野祖教先生は、この綱領を、「実践の立場で、神社神道というものを説明して行くと、その手掛りとなるもの」、そして、その内容は、ある程度の「教養のある人なら理解でき」て、現場の「神職の知識の中で取り扱って行ける程度の古語を、できるだけ生か」して、「敬神生活の話

の口火が切れるよう、多少一般的でない言葉」で、かつ、「神社界として、一般の人にも知ってもらわねばならぬという言葉」を使つて纏めた、とも述べておられます。小野先生が、実践の場として、社頭講話をイメージされていた、という事を知ると、今日の会の励みとなりますね。

さて、話を戻しますと、大祓詞から、神道に関わる人にとって、最も大切なテーマの一つは、天皇陛下のご使命である地上の「安国」化を、君臣一体となつて目指す、という事なのです、というお話をさせて頂きました。それをどのような行動で実践するのは、もちろん、人それぞれですが、少なくとも、私達、神職は、毎日、大祓詞を奏上しているわけですから、その折りには、必ず、天皇陛下が、今日も、ご自身のご使命である、地上の安国化を願ひ、世界の平和を願ひ、神事を齋行なさっているという事に想いを馳せ、そしてまた、私達自身、神職としての使命を再確認する事になるわけです。

という事で、神社で神主さんを見かけたら、あ、この人は、世界の平和を願っている人だな、と思い出して下さい。私達神職は、もつと言え、神道に関わっている人なら誰でも、どここの出来事であろうとも、いつなんどきでも、そして、もちろん今日も、無条件に、平和を願っているのです、というお話でした。

以上です。ありがとうございました。

（東京都 椿大神社 出仕）

上げ馬批判に直面した当事者としての 神事継承についての一考察

伊 藤 彰 教

我が国では四季折々に神祭りの行事が行われ、その地域ごとに伝統色豊かな神賑行事が地域を彩ります。当社でも五月四日、五日の御例祭には広く多度祭と称される例祭神事が賑々しく斎行されます。その中でもとりわけ名高い行事が「上げ馬神事」でございます。

上げ馬神事は人と馬とが一体となって坂を駆け上がることが殊更注視されますが、古式による氏神神社を中心とした頭屋（とうや）、宮座制度に基づく神事の継承と、青年の人生の通過儀礼が現在に正しく受け継がれている事が、三重県指定の無形民俗文化財である価値であります。

ところが昨年、コロナ禍も落ち着き、令和元年以降四年ぶりに行われた上げ馬神事において、坂上げに挑んだ祭馬が転倒、骨折し、専門家による判断の下、止む無く安楽死の処置がとられました。

この事がSNSを中心に拡散され、不特定多数の人から、馬を虐待している。神事をかたる残酷な行為だ。即刻中止せよ。という抗議の電話やメールが殺到し、社務すらも出来ない程の凄まじいものでした。SNSには、敢えて馬が転倒している所や、馬を叩いているように見える部分だけを切り取って編集し、動画や写真を拡散し、誹謗中傷を浴びせる。また、当社神職や祭事関係者個人の事柄について、真為の確認ないまま、名指しで非難や悪口も相次ぎ、動物愛護を逸脱し、更には祭事関係者の風貌が悪い。神事についても、観光目的やお金儲けの為に近年始められたなど、荒唐無稽こうとうむけいの風説が流布するに至り、極め付けは、爆破予告までされるといって誠に憂慮すべき事態でありました。

これら反対派の抗議に屈して、神事を止めてしまえば簡単な事でしょう。電話を受ける度に「もう止めてしまっても…」そんな思いが頭をよぎる事もあったことも事実です。

しかし、その中であつても、やはり、先人たちが幾多の困難を乗り越え、現在まで受け継ぎ伝えられた多度祭に込められた想いや意義を思うにつけて、何としても祭りを継承していく事が、私たちの責務であるという認識を堅持し、神事の重要性は維持しつつ、現代に受け入れられる神事の在り様に意を用い、問題があれば躊躇なく改善するというこの提言を基本方針として本年度の上げ馬神事の準備が進められました。

これを受けて、当社および御厨氏子の代表により組織される「御厨総代会」では、上げ馬神事が抱える問題点である祭馬の取り扱いと神事の実施について、第三者の外部委員による客観的かつ世論の動向に基づく神事の在り方として意見をいただき提言を取りまとめる事となりました。検討会では

- 1、馬の選定・管理について
- 2、馬具について
- 3、動物虐待の可能性のある暴力行為について
- 4、訓練について
- 5、環境について
- 6、上げ坂について

の項目について細かく検討し議論を重ねました。

これらの提言の中で最も大きく思い切った改革は、上げ坂の壁の撤去でした。これにより、今年の上げ馬はすべての馬が坂を駆け上がることができました。

たとえば形は変われども、祭りを継承していくことの意義を最重要課題とした選択でした。今年の祭りを終えて、昨年のような抗議は激減し落ち着きを取り戻しました。一般参拝者

の声として「是非とも祭を続けて欲しい」「応援しているから」という励ましのお言葉も多数ございました。祭に反対する者たちは敢えて大げさに騒ぎ立てますが、賛成、肯定する人たちは何も言わず、騒いだりはしません。この事からも、上げ馬を続けて欲しいと思う人が圧倒的に多いという実感はございました。

昨年「なぜあんな高い壁が必要なんだ？」という抗議の電話が多数あったのですが、自分なりにふと考えてみますと、上げ馬神事が始まったのは南北朝時代の暦応年間だと伝わっています。この時代は歴史的には我が国が非常に荒んでいた時代で、皇室が南朝と北朝に真二つに割れ、互いが睨み合い、いつ戦が始まってもおかしくはない不安定な時代でした。当時多度大社のある北伊勢地方は北畠氏の勢力による南朝方に属し、北朝方の室町幕府と敵対関係にありました。

北勢四十八家は南朝方の城主、豪族の集合体であり、壁が出来た背景として、北勢四十八家が室町幕府に対する示威行為として武芸の鍛錬として行ったのが始まりではないかと考えるに至りました。つまり、山城を攻める時、奇襲攻撃が最も有効な作戦であり、相手の城に攻撃を仕掛ける時、騎馬のままで相手の城の城壁や郭を飛び越えて突入する必要があります。武芸の鍛錬をしていると幕府方に謀叛だと怪しまれるので、敢えて神事を

行っているといえ幕府方も何も言えない。私は上げ馬神事の壁の原点がここにあると見
出しました。

最後に上げ馬神事がコロナ禍によつて失われた四年間と共に、失われた日本民族の信仰
心と精神性を、神道教化を通して取り戻すという事が私達に与えられた使命だと思ってい
ます。式年遷宮の神事が来年から始まるのですが、伊勢の神宮を御側にいたたく地域の神
職として、どのようにして敬神の心を継承していくべきか真剣に考える事が急務であると
痛感しております。

以上で終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございます。

(三重県 多度大社 権禰宜)

社寺参詣と鉄道

森 智 宏

神社にとって最も多くの参拝者をお迎えする正月初詣。

その初詣と節分恵方巻き、バレンタインチョコに共通する点は何か分かりますか？

答えは、営利目的の企画が、古くから根付く伝統文化であると認識されるまで地位を高めたものである事です。製菓会社が考案したバレンタインのチョコレート、海苔問屋組合が考案した節分恵方巻き。ここまでは有名な話ですが、実は「初詣」は鉄道会社が営利目的に考案した施策であったのです。

本日は、鉄道会社が生み出した「初詣」が国民的行事に至った経緯と、社寺参詣と鉄道会社の関係性について、東京大学学術研究員平山昇氏の著書「鉄道が変えた社寺参詣」の内容を元にお話し致します。

「初詣」の言葉が初めて登場したのは明治十八年であり、社寺の歴史からすると百四十

年前と歴史が浅く、明治期以前には「初詣」は存在せず、当時の社寺参詣は氏神様、初縁日、恵方参りが主であり、交通手段も徒歩もしくは船に限られていました。

明治期に入り鉄道が開業すると人々の交通手段に新たな選択肢が生まれることになりましたが、鉄道が現代のように身近な交通手段にすぐに定着する事はなく、当時の人々にとつて鉄道は特定のハレの日だけに利用する特別な乗り物である縁遠い存在でした。

その中で、鉄道会社は鉄道を身近に利用してもらい需要を増やす施策として、社寺参詣の足に鉄道を利用してもらう計画を行ったのです。これが「初詣」の原点となります。

「初詣」の初見は、先に申し上げたように明治十八年、当時日本で初めて開業した鉄道の路線である新橋―横浜間に「正月三ヶ日のみ普段は通過する川崎駅に急行列車を臨時停車させるので、川崎駅で降り最寄りの川崎大師に参拝して下さい」と言う告知広告の中に初めて登場したとされています。

明治期から、正月三ヶ日が祝日（休暇日）に制定されたことも後押しを受け、鉄道を利用した「初詣」が徐々に流行していきます。

そのような時代背景もあり、明治期から昭和初期にかけては、全国各地に社寺参拝客輸送を目的とした、有名社寺へのアクセス鉄道が様々敷設されて行きます。それも有名社寺

になると何社もの鉄道会社が路線を競合する形で建設されて行き、それぞれの鉄道会社が参拝客を奪い合う構図が生まれた事による、鉄道会社の集客競争が「初詣」を国民的行事にまで地位上げた要因であつたとされています。

例を挙げると、前述の通り川崎大師へのアクセス路線には現在の京浜急行電鉄が新たに路線を伸ばし、鉄道省の既存路線と需要を競い。

伊勢神宮へは参宮鉄道（現在のＪＲ東海参宮線）、参宮急行電鉄（現在の近畿日本鉄道）、伊勢電気鉄道（現在は廃線）の三社。

日光東照宮へは、日本鉄道（現在のＪＲ東日本日光線）、東部鉄道の二社が「日光戦争」と呼ばれる程の熾烈な争いをするなど、全国各地で各鉄道会社の参詣客を奪い合う構図が出来上がりました。

その中でも、一番の需要である正月三ヶ日には、もともと競争熱が高まり、各鉄道会社が「初詣」をいかに上手くプロモーションをしていくか競争に勝ち抜くポイントとなりました。

正月三ヶ日に合せ、増便や快速運転の実施、各種割引切符を販売するなど、自社が持つポテンシャルを最大限に活かす施策を、「初詣」と銘打って各鉄道会社が全力で発信し

ていったことが、「初詣」を国民に定着させた要因とされています。

現在でも社寺参詣客輸送を目的として開業した各鉄道会社は、正月期間の深夜運転の実施、初詣きつぷの販売など社寺参詣客の対応を行い、特に伊勢神宮へは近畿日本鉄道が観光特急しまかぜ、日光東照宮へは東武鉄道がスパーシアXと言った個室や快適な座席を設けた看板列車を運行させるなど、開業当時の目的である社寺参詣へのアクセス鉄道の誇りを軸に経営をされています。

このように社寺参詣と鉄道は歴史的経緯が深く関係しています。しかしながら、今では自家用車が普及し、特に地方においては自動車での参拝アクセスが大半であり、鉄道での参拝が衰退している事は否めません。

その中でも神社関係者である我々は鉄道会社感謝の念を持ち、神社と地域の鉄道会社が手と手を取り合い地域公共交通インフラの更なる強化に協力していく必要があると考えます。

また、参拝者には社寺参詣と鉄道の歴史を考察しながら、鉄道を利用し参拝してもらう事により、各地域の発展の歴史を感じながらの有意義な社寺参詣が楽しめるのではないかと個人的に思いを巡らせています。

(滋賀県 多賀大社 権瀬宜)

なぜ田の神を祀るのか、 それは駱駝に聞け

河 本 文 夫

田地に水がはられ、早苗が初夏の風に揺れております。田の神、水の神に感謝し、代満、虫よけの祈祷と続きます、が、しかし耕作放棄地が増え雑草は伸び放題、まーよく草は伸びる。私も白衣袴の装いより作業着を着ている方が多いこの頃。

草の神さまにはもう少し、遠慮してもらえないかなと思うのですが、日本ではこのように、生きて行くうえでの諸々を神として祀り感謝の祈りを捧げる宗教心を持っておりますが、さて、そもそも宗教とは、なんですか。

考えてみますと、一言で言えばそれは生きるすべ、すなわち術、人類が生活する環境で、その環境の中で生活するのに、お互いに、持ち合わせる生きるテクニクと言えるのではないのでしょうか。

水って誰が作ったの、稲の苗、その苗誰が作ったの？ 植えておけば時とともに育ち、

その苗が成長し稲穂となり米が取れる。そしてその米が日本人の主食です。しかも稲は八千年の連作に耐えた植物で、本来にありがたい植物と思いませんか？ 昨今の科学技術が発達した時代と違い、縄文弥生時代、誰にも分からない自然の営みに対し、そりゃ神さまの仕業よ、田の神様、水の神様、その中でも最も不思議な空に輝く太陽、燃えてる感じはするが、どうして燃えてるの？、薪を焚べてる様子はなし、太陽の神さまの仕業と言え、共通認識でみんな丸く収まる、

「その神様にお供えをし、お願いすればもつと豊作になるよ」この気持ちが神道の根源だと思えます。

この気持ちは地球上どここの地域でも？ そうじゃないのですね。日本という国は地球上で極めて、稀な地域です。四季があり、海に囲まれ温暖、こんな自然の豊かな島国はそうありません。イギリスも島国ですが、日本とは異なり寒い国です。

一方多くの国は一神教です。そうそう、例のイスラム原理主義、例えばIS、昨今ISのニュースを聞きませんが、あのISが掲げている旗、黒字に白いアラビア語で書かれています。あれなんて書いてあるのでしょうか。ご存知ですか？

「アッラー以外に神はない」

と書かれているんですよ。そしてその下に丸の白抜きに黒で書かれています。そこには何と書かれていますか

「ムハンマドはアッラーの使徒なり」

と書かれております。

まさに彼らは一神教、さて彼らの生活環境は？ といえは砂漠からステップに至る地域、この地域は生きるのに極めて厳しい環境です。米のような作物は育たず草原が広がっており、その厳しい環境から生まれたのがイスラム教です。

我が国は、自然が豊かであるからこそ、そこから育まれる種々の恵み、環境に、それぞれ神を感じる思考となるのですが、厳しい環境ではそうはならず、この地球をつくられた神、一神教に結びつかざるを得ないのでしょう。

先日、録画しておいた、アラビアのロレンスを改めて見てみました。この映画は四時間にも及ぶ長い作品です。しかし厳しいながらも美し砂漠の風景、そこに生きる人間が実に美しく描かれています。水が命、最初の頃ロレンスの友人のアラビア人が、同じアラビア人に殺されます。

「他人の井戸の水を飲むな」と。

我が国では、他人の井戸の水を飲んで殺されることはありません。

さて、イスラムの戒律の中で、我々が知っているものは

① 禁酒

② 女性はブルカを被る

③ 豚肉を食べるのは禁止

等ですね

なぜ禁酒なのでしょう。すべてのイスラム教の国が禁酒というわけではないのですが、特にサウジアラビアは厳しい。簡単に言うと、お酒を飲むと、水が欲しくなります。水が豊富にはない。

そして女性はブルカという黒い布をかぶり、肌を出さない。則ちアウラを隠さねばならないのです。アウラとは何でしょう、アウラは恥部のことです。則ち、自由にするとどうでしょう。男性の性欲を刺激し、子供ができる。厳しい環境では多くの子供を養うことができない、則ち、生きるための戒律なのです。

そして日々の食べ物で豚は禁止です。なぜでしょう！不思議ですね。

ま、家畜と言えば、牛、豚、ヤギ、羊、そしてラクダ。

豚は、ラクダ、牛、ヤギ、羊と大きな違いがあります。なんでしょう？

ラクダ、牛、ヤギ、羊は反芻動物、草を食べる動物です。砂漠、ステップの自然では、草しか生えません。

反芻^{はんすう}は、一度飲み込んだ食べ物を再び口の中に戻して、再咀嚼^{さいそしゃく}することです。反芻動物の最大の特徴は、四つの胃（第一胃、第二胃、第三胃、第四胃）を持つことです。人間や豚の胃に相当するのは第四胃ですが、その前に三つの胃があります。したがって、消化機能も人間や豚など胃が一つしかない単胃動物とは大きく異なります。

ところが豚は違います。雑食性ですが、主に穀物を食べる。則ち人間と同じ穀物を食べるということは、人間の主食の穀物を豚にあてがわなければならないと言うこと、即ちある意味で人間の敵ということになるのでしょう。

しかもラクダはすごい動物ですね。百リットルの水を飲むと、十日水を飲まずに動けるのです。ですから砂漠、イスラムの世界では、ラクダは神から与えられた素晴らしい動物とコーランにも記されています。

そうそう、ラクダはコブに水をためてると言いますが、あれは間違いですよ。あのコブは水のタンクではありません。あのコブは脂肪ですよ。この脂肪を使って生きていける、

水も飲まなくても、砂漠に生きる民にとってまさに神からの与えられた動物なんです。

以上非常に大雑把にその戒律の意味を申しましたが、それを考えると、日本は、世界でもまれに豊かな環境なんですね。草の根を喰^はんででも生きていけるといふ事。山から流れる清水をそのまま飲むことができます。砂漠の民からすると信じられない事。

ここから生まれた宗教が、多神教となるわけで、すべての生き物に命を授ける太陽、そして夜を照らす月、水の恵みをもたらす山を神様と考えるなど、様々のものに感謝の祈りを捧げることになるのでしょうか。

ラクダは言います。日本人よ、君たちは、本当に幸せだよ、神の恵みにもっと感謝しなくては。ご清聴ありがとうございます。

（山口県 宮尾八幡宮 宮司）

奉務神社について

湯谷由紀子

私が権禰宜として奉務する神社は、瀬戸内海に位置する香川県高松市木太町に鎮座する氏神・八坂神社です。

八坂神社は、屋島山より一里ばかり西南の方にある木太郷の大昔から、木太郷と西潟元の村民から氏神として崇拜されてきました。昔からの言い伝えによると、木太郷は昔の名前は入江の郷と言っていました。村中に大木があり、枝葉が繁茂して、天日を覆っていたので、その名を改めて木大或いは喜多とも称されてきました。後世、大の音が転じて木太と呼ぶようになったのだらうと、言われています。神社は、木太町の氏神として町民から尊崇されています。

この私が奉務する八坂神社は、初代・赤澤龍江宮司の明治五年から、私の祖父・五代目赤澤齋宮司、さらに私の母、六代目住吉紀子宮司になります。私の母、紀子宮司は、

昨年より体調を崩し、現在の実務は、父と私で奉仕しています。ちょうど今頃は、夏越の祓いの準備に取り掛かっています。茅の輪を総代の方々と協力して、茅を束ねた大きな輪を大鳥居に取り付けます。茅の輪くぐりの作法は、

「水無月の夏越しの祓いをする人は、千歳の命のぶというなり」

という古歌を唱えつつ、茅の輪に入り左回り、右回り、左回りと、八の字を書くように三度くぐり抜けます。こうして、地域の皆様が心身共に清らかになって、後の半年間を新たな気持ちで迎えることを願います。

八坂神社の例大祭である秋祭があります。この祭事は、十月の第一土曜日、日曜日に行われ、木太町・氏神八坂神社において一番大きなお祭りです。各地区の神輿が担がれ、神社の参道を練り歩きます。この御祭のときに、浦安の舞が奉納されます。この舞姫さんたちは、祭の地区の頭屋の氏子さんと、女の子の小学生の子たちから選ばれます。夏頃から練習を始め、秋のお祭りで披露します。この女の子たちに舞を教えるのが、私の役目です。毎年、この祭りの時期になると、かわいい小学生の女の子たちが、現代のテンポとは異なる、ゆつたりとした昭和天皇の御製である歌詞に驚きながら、お稽古をします。最初は、私の踊りについてくるのが精一杯なのですが、練習を重ねていくうちに、みるみると成長

して、立派に秋の大祭で踊れるようになります。毎年のことですが、神様に見守っていた
だき、子どもたちの素直さが、浦安の舞の奉納に導かれているように感じます。

また、昨今、地震などの自然災害が増えています。先の石川県の能登半島で被災された
方々に、お見舞い申し上げます。

この地震などの自然災害において、八坂神社を通して、氏子さん、地域の方々と関わり
合いになる事が、とても大事なことで感じています。神社の防災のあり方も、防災拠点
として果たす役割を考えていく必要があると思います。祭りなど地域を通して、現状の防
災の状況把握があります。八坂神社では、地域を歩こうウォーキングを半年に一回程度、
行っています。この時などに、地域のつながり、避難先の確認をする事が大事だと思っ
ています。

神社を中心とした防災コミュニティを形成することは、神社においても防災の重要性を
感じさせるものです。

古来からある地域の氏神として、考えていかなければならないことだと思っています。
神社には、七五三詣りの幼稚園児や地域学習の小学生など様々な方が来られます。いつ

も参拝の仕方などや、神社の歴史をお話します。この時、昔の地域の生活や由来など、ともに、もう一度、私たち祖先が自然の中で工夫して作り上げた日本の生活、文化を見直して、子どもたちに伝えていくことの大切さを考え、お話しさせてもらいます。

最近のゲームやユーチューブが好きな子どもは、つまらなそうですが、境内の建物、周りの木々一つ一つにも歴史があり、不思議な発見ができることもあります。ここ二、三年のコロナ禍や、世界の情勢の争いなどある中で、人々の心が少し寂しくなっているように感じます。

もう一度、私たちの心の中にある日本の生活、文化を見直していくことはとても大切だと思います。

八坂神社の境内には、明治時代に神社に貢献した、初代宮司 赤澤龍江を称えた石碑があります。

人はみな誠をひろく施し、

みやひ心は神もうけけむ

翻訳…人々が皆、誠実さを広く施せば、神もその真心を受け入れてくれるでしょう。

ご清聴ありがとうございました。

（香川県 八坂神社 権禰宜）

道の精神——神道と名付けた先人の知恵——

塩 崎 昇

今、世界中の人たちが日本を訪れています。

なんと、訪日外国人の六割以上が二回以上の来日経験があるリピーターなのだそうです。彼らにとっての日本の魅力はなんでしょうか。

それはきっと、日本はとにかく清潔である。食べ物がうまい。バスや電車の時間が正確で旅行計画が立て易い。ものが盗まれない。落とし物をしてもし拾われて手元に返ってくる。

皆さん、こんな国、世界には無いのですよ。

日本人にとって当たり前のことが、外国ではとても驚くべき事なのです。

では、日本と日本以外の国は一体どう違うのでしょうか。

その違いを明確に述べるのならば、それは、神道に基づく文化の国、日本と、一神教に基づく文化の国々との違いです。

今日お集まりの皆さんは皆神職です。ご存じの通り神道には、浄明正直じようめいせいちよくの四つの徳目があります。神道そのものが大らかで清潔で正直な文化です。それに対し一神教による文化の特徴は何か。一神教には三つの共通点があります。開祖、教祖の存在。そしてその教えを説く教義や經典がある。そして教義や經典に背く事の無いよう戒律があります。これは、裏を返せば、我が宗教以外の宗教を認めない。そして、どちらが正しいかで争いを起こすことを正義としている。その結果、敗者から富を奪い、更に勢力を広げ布教することを是とする。それが、一神教に基づく文化です。世界の歴史がそれを証明しています。私たち日本人にとっては、とんでもない考えです。

日本にも一神教が入ってきました。仏教の伝来です。今、日本にある仏教というのは日本独自のもので、当時伝来した仏教は一神教と同じです

ならば、私たちが先祖から受け継いできた神々への信仰、これを何と呼ぶべきか。私は仏教に対し、神の教え「神教」と名乗っても良かったのではないかと思います。なぜならば、

仏教伝来に激しく反発した物部氏や中臣氏の力を以てすれば仏教に劣らない教義を纏める力があつたと思うからです。

しかし、そうならなかった。いいえ、敢えてしなかったのでしょうか。もし、仏教に対して神教としていたなら、どちらが勝れているか、どちらが正しいのかという争いになり、国は大いに乱れてしまう。それ故、教えという字を当てず、道という字を当て神道とした。これが先人の知恵。すばらしい知恵だと思います。

宗教の教、「教」^{きょう}の精神は、その通りにやりなさい。これに尽きます。一本道しか認めない。しかし、道は、一本の道じゃない。枝分かれして、そこからまた枝分かれしてゆくものです。武道や芸道も同じです。流派が産まれます。しかし、「道」の精神では流派同士が争う事をしないのです。「他流試合を禁ずる」武道でよく言い習わされた言葉です。どの流派が勝れているかを競い合うことを無意味なものとし、厳しく戒めています。言い換えるならば道においての精神性こそ重要であり、流派の違いは技術の違いでしかないのです。ここで皆さんにお尋ねしたい。武道や芸道をたしなんている方が多数おられると思いますが、その武道や芸道の精神性の中に、神道の浄 明 正 直の精神はありますか。ある

でしょ。全部共通しているはずです。道の精神の中心にあるもの。それはまさしく神道精神そのものです。

ここで、道の精神を極め実践している日本人の話をしましょう。メジャーリーグの大谷翔平選手です。彼は、野球道をひたすら極めようとしている。そう思わせてくれることが沢山あります。彼は野球の打つこと、投げることに、走ることに三つをひたすら追求している人です。バッターとピッチャーの二刀流、そして投手なら怪我のリスクがあるのに果敢に走塁をします。彼は常に挑戦者でありつづけます。そして子供たちに夢を与え、子供たちのお手本で有りつづけてくれます。

彼のとても明るく素直な態度。心が清らかで正直で常に正しい行いをしようとする。神道という浄明正直全てを持っている。彼の野球選手としての技術だけでなく、彼の人としての品格をアメリカ中の人たちが賞賛し、彼らの心をわしづかみにしています。

私たちも自信を持たなければなりません。彼の振る舞いは日本の少年野球、高校野球、日本人の教育で培ったものです。私たちもみんな教育を受けています。彼の礼儀正しさは日本人に共通するお手本の姿です。日本人なら誰で持っているのです。

道の精神。己を鍛え、業を極めるだけでなく、心を磨き精神を鍛えること。その大本に神道精神があるのです。そして今、神道の文化である日本に世界中の人たちが驚き、感銘を受けている。一神教世界中の人たちが神道の精神文化を受け入れているのです。

戦争に負けた日本人は西洋の先進的価値観を受け入れることに熱心ですが、一神教文化から産まれた新しい価値観は本当に正しいのでしょうか。富を独占して、尊大な態度で上から目線で自分たちの「教」を押しつけるのが一神教文化です。海外からは入ってくるいろんな思想、もはや日本語に訳すことができず、横文字で入ってくるグローバルとかエスディージーズとかリベラルとかいろんな価値がありますが、道の精神から見れば、どれも矛盾を抱えたものばかり、元から日本にある当たり前のことを、金儲けで優位に立つがための仕掛けとして基準や規制を決めて押しつけてくるものばかりです。

それをうまく躲して、包み込み、世界を正しい方向に導いていけるのは、神道による文化をもつ日本だけなのです。

我々神職は神道を極めるための、神ながらの道を歩みつづけ、やがては人々を導いてゆ

かねばならない。私たちの責務はとても重要なのです。共に研鑽しようではありませんか。

（和歌山県 伊勢部柿本神社 宮司）

氣高く強く一筋に

松井佑一

「氣高く、強く、一筋に」という堅苦しいタイトルを見て、一体何が始まるんだと身構えていると思います。今日は、自分の将来を決める大きな選択を目前にした中学三年生の皆さんに、進路指導学習としてお話をしに来ました。

この「氣高く、強く、一筋に」という言葉は、明治時代に生まれた、中村天風という方がおっしゃったものです。「新しい計画の成就是、ただ不屈不撓の一心にあり、さらばひたむきにただ想え、氣高く強く一筋に」という言葉です。

氣高いとは、正しい道のりを歩んで目的を遂げようとする心です。楽をしたり、脇道から攻略しようとしたり、ズルいことをしたり。そういう悪い方法は決して使わずに、目的を遂げる強い決意の心です。

新しい計画といいましたが、これは、どんな事にも当てはまります。氣高い心を持って、

困難に負けることなく、一生懸命に頑張れば、どんな事も成し遂げられるという教えます。今日、私は神社の神主として、みなさんにお話をしています。神主になる、という事は、当然自分で決めました。ただ、最初から神社の神主になろうと決めていた訳ではありません。いつ決めたかと振り返れば、高校二年生の時です。県庁で募集されていたプログラムでアメリカへ留学し、遠く離れたアメリカから日本を見たとき、自分の国が、思いやりに溢れた、とても素敵で美しい国だと再発見したのです。素敵で美しい国、日本。その日本に大昔から存在している神社に興味がわき、調べ、学ぼうちに神主を目指したというものです。

こう聞くと、順調に進路を決めてきたように思われるかも知れませんが、全然違いました。皆さんと同じ中学三年生のときは、受験する高校も中々決められませんでした。学校一遅かったのです。友達は、目標を持って進路を決めていきます。でも、私はやりたい事がみつからない、人生の目標と言われても分からない。だんだんと自分だけがフラフラしているように思えて、焦る。ただ焦ったところで何も変わらないので、余計悩むことになります。

結局、その時の彼女に誘われて、一緒に近くの進学校へ行こうと決めました。それをそ

のまま担任の先生に伝えると「そんなふざけた理由で進路を決める奴があるか」と怒られます。せっかく決めたと思ったのに、困った。そこで、先生にどうしようかと聞けば「目標がないなら、工業高校で手に職をつけてこい」となりました。じゃあそれが良いと思つて、工業高校へ行くことに決めます。

そうになると、一緒に進学校を目指そうといった彼女と、進路が違つてきます。今度は彼女に怒られるわけです。「なんでそんなねん」「あんた私と約束したんと違うんか」と。本当、散々怒られます。その時は、もうこの世の終わりのような感じです。担任には怒られ、大好きだった彼女にも怒られ。進路も決まったような、決まつてないような。もう何一つ面白くないのです。次から次へと、不満や文句ばかり出てきます。

ふと、閃いたのです。

これは、何一つ自分で決めていないから、不満や恨み言があふれてくるのだと。例えば駄目でも、自分で決めていれば反省はあつても後悔はないだろうと。それからは、小さなこととも自分の意思で決めることにしました。その決める基準に、私は先ほどお話しした「氣高い心」を据えました。嘘や誤魔化しではないか。人を傷つけていないか。正しい道だと胸を張って言えるのか。これを自分の判断基準にしたのです。それから、当然いろいろ失

敗れますが、後悔はしなくなりました。自分が正しいと思った方法で挑戦し、失敗したからです。もったいようすれば良かったか、という反省は山ほどありますが。皆さんにも、より良い方法、正しい方法を考えながら、目標に到達する大切さを知って頂ければと思います。

余計なことですが、彼女にこの世の終わりのようなフラれ方をしてから、十年後に再会します。もうお互い当時のことは、お笑いのネタです。そんなこともあったなと、大笑いです。明けない夜はないと言いますが、本当です。自分の目の前には、今の一瞬しか広がっていません。だから、目の前の出来事に捕らわれて、一喜一憂します。それは正しい気持ちです。

ですから、気持ちが苦しいときは、休めば良いのです。十分に休んだと思ったら、一步を踏み出しましょう。先ほどの「人を傷つけていないか」の「人」には、自分自身も含まれます。自分の気持ちも、どうか大切にしてください。

折角ですから、この「氣」についても、少しだけお話します。

氣というものは、私たちの周りに沢山あります。常日頃、私たちは皆、この氣を扱っています。何か氣功の先生とか、特別な修行をした人だけが扱うものではありません。一番

身近な氣は、何でしょうか。私たちの周囲にある氣。空中の氣、「空氣」です。はるか天に宿る氣は、そうです、「天氣」です。人間にも氣が宿っています。氣に力が入れば、何でもできてしまう。これは「氣力」と言います。何事にも氣がある人は、良いですよ。あとは、氣が付く人とか。そういう人は、当然「人氣」なんです。こうした、氣というものには陰（マイナス）と陽（プラス）があります。「陰氣と陽氣」。どっちかに偏ると困ります。つまり、氣というものは持ち方次第。これを「氣持ち」といいます。

このように、あらゆる物には氣が宿っていますが、この氣が枯れると「氣枯れ」。すなわち、神社で嫌うべきものとされる「穢れ」になってくるのです。穢れは、尊い神様のお力でもってお祓いをして頂き、清らかな心と体を取り戻す。これが、日本人が大昔から受け継いできた伝統です。

ただ、お祓いで穢れを除いても、枯れたままではいけません。そこで、すぐれた氣を取り戻すために、「英氣」を養う。おいしいものを食べたり、趣味や好きなことに没頭したりしましょう。大事です。私には、会って顔を見るだけで元氣になれる人がいます。この元氣というのは、やはり一番大事です。なんといっても氣の元です。全ての氣の源です。皆さんには、ぜひ、自分の内側にある良い氣を高め、何事にも屈せず、ひるまず、ひた

むきに一步を踏み出し続けて頂きたいと思います。そのためにも、自分の氣持ちを大切に
することを心がける。そして、何よりも、毎日を元氣に過ごしてほしいと思います。

ありがとうございました。

(滋賀県 阿賀神社 権禰宜)

優しい神社とは

岡 部 和 久

「神社は優しくない」十数年前、九才の息子が涙を一杯ためて私に訴えます。

当時私は畿内を中心に二百を超える社寺を巡拝してフィールドワークを行っており、息子もよく一緒に巡っていました。夏休みの連日猛暑が続く日にある神社の長い階段を登っていると、老婦人が先を歩いています。私は母、彼の祖母によく行っていたように、恥ずかしがる息子の背中を押していつもの様に彼は老婦人の手を取り二人一緒に参拝しました。手水舎で二人何やら話し込む彼は、先に参拝済ませた私の所まで駆け寄ってきて、「父さん、お婆さんにリュックにあるペットボトルの凍らしたお茶をあげて良いか」と聞くので「差し上げなさい」と伝えました。

もう少しゆっくりしてから帰るといふ老婦人と別れ我々は次のお寺に向かいました。

空調の効いた本堂から手入れの行き届いた庭園を眺めながら振る舞われた冷たいお茶を頂いてほっと一息ついている私に、入るなりずっと一心に仏像を見上げる彼が私の背中にはなしかけました。

「僕はお寺の方が好きだ」

「どうして？」

「さっきのお婆さんどうしてるかな？」「長い階段上がって水飲む処もないよ。手を洗うところの水飲むうとしてたで。神様とゆっくり話したいと言うのに座る処もないよ。階段に座ってたで。」「ここに来たらゆっくり座って冷たいお茶ももらえるで。」「神様とゆっくり話できるで」

彼は振り向き私を見つめます

「父さん、神社はなんで手をパンパンたたいたら直ぐ帰らなあかんの？神様とゆっくり話したらあかんの？」

私を直視する涙に溢れた息子に学んだ学問は何もその解とならない。私は沢山の解を求めて考えをめぐらすも出てきた言葉は、

「お寺は入るときにお金払うからかな」

勿論これはきつと彼が期待した答えではありません。神社が好きな父ならの言葉を待っていたのです。

彼は号泣して怒った顔で「神社は優しくない。」と叫びました。お坊さんが異様を察して飛び出してきます。

しかし私は彼の後にあるお不動様が私を睨んでおり固まって動けません。

此が正に私の発心になりました。

やがて護国神社に奉務すると遺族の方はご高齢の方がほとんどです。桜が散った頃、その方は車椅子でお越しになりました。「毎年お父さんに会いに来ていたけど本殿に上がれなくなつたからもう来年からは来ない」そして泣きじゃくるその姿はあのときの息子と重なり老婦人が幼い童女に見えます。童女の手を握り私も泣きながら「私がきつとスロープを作りお父様の側にまで上がって頂きます。必ずお約束します。」

社務所に帰って熱く訴えるも「お金がない」「車椅子は年一人ぐらいしかこないから要らない。」来たくても来れない人を思わないのか？神社は優しくないのか？私の中にある

お不動様が宿りました。

やがて新たな宮司が赴任されてきて「この神社の窮状を救うアイデアを出してくれ」と言われたので十数本の稟議書を次々に提出しました。勿論その第一号はスロープです。第二号は職員も少なく手が行き届かず荒れた境内に清掃奉仕隊を作ることです。私も良く清掃奉仕をしていましたが、汗をかいたあとで空調の効いた社務所から一言のために出てくるのは間違っている。神職が率先して誰よりも汗を流し、終われば冷たいお茶を用意しておき、頂いたお供えをストックして参加者皆で宮司とお茶会をして頂く。宮司に「貴男のお話はお金がかからない。名刺を配ってください。皆さんは神職に憧れているのです。宮司の名刺を貰ったら必ず人に話し、次にまた違う人を連れて来てくれます。その方達は氏子も持たない当社の核となってくれます。アイドルの握手会作戦です。」

そしていまや三年を超え毎回三十名超える参加者と十二月にはお茶会ではなく頂いたお酒と持ち寄ったおつまみでミニ忘年会を行います。その最初の年に清掃奉仕隊の方々に泣きじゃくる老婦人の話をしました。「岡部さん、やろう。困ってる人がいるなら助けなければあかん」そして奉賛金活動が始まるも他社みたいな大きなお金が来るわけでもなく、

十万円は数える程で、その大部分が一万円以下ですが、例えどんなに少額でも掲示板に全員の名前を掲げ、同時に始めた社報に名前を記載し配布しました。その結果、人が人を呼び、思ったより早くにスロープは完成し、今ではデイスービスの方々が多く車椅子で参拝されています。施設職員にお聞きすると本殿までスロープで上がれる神社は少なく施設職員のネットワークで遠方からお越しになられており、その中には遺族の方もおられ、参拝出来る喜びをお届け出来るようになりました。

P・Fドラッカーは著書『非営利組織の経営』で「日本にこそ最古の非営利組織があり、そこにはミッション・リーダーシップ・マネジメントの本質がある」と説き、先の例ではそれは「清掃奉仕隊は組織における無給のスタッフ」にあたり、現代欧州の知性と言われる経済学者ジャック・アタリは『合理的利他主義』は日本に手本があると述べ先の例では「スロープは利他の経済学」にあたります。しかしこれらは、彼らが日本に手本があると述べるように、「お天道さま（天照大御神）が見てござる」我々は先祖から代々伝えられてきた「困ったときはお互い様」「他人を助けることが、自分のためにもなる」自利は、利他なり。利他は、自利なり。を實踐してきた当たり前のことです。そこには日本民族の日用の間に

ありて神道の本質は正にそこにあると考えます。

最後には是非紹介したいのですが、あまり知られていませんが、戦後最初の霊霊簿抹消を求める所謂靖国裁判を行ったのはキリスト教神父の婦人で、早い時の流れで世間が忘れ去った最晩年に「戦後はどんどん進んで行きあの人が生きていた事を皆が忘れてしまった。ただ毎年届く靖国神社からの便りだけがずっとあの人が生きていたことを忘れないでいてくれる」と述べられました。神社の優しさはイデオロギーさえ乗り越え、凍った心を優しく溶かしたのです。

息子よ 今父さんはやつと君に言える

「優しい神社とは優しい神様の下で優しい神職と優しい参拝者で溢れる素敵な場所だよ。君やこれからの若い世代にも何も変わらない。優しい神社がある限り日本は大丈夫だ。また日々の生活にちょっと疲れた時がきたら優しい神様の下に行きなさい」

皆様も是非優しい神社を目指してください。ご静聴ありがとうございます。

(大阪府 大阪護国神社 権瀬宜)

神 楽

山 下 裕 嗣

「神楽はな、神さんが楽しむって書くねん」これは私の浪速神楽の師匠、すぐその西成区の津守神社の今江宮司が良く言う言葉です。

神楽にもいろいろなものがありますが、この日本の信仰の中で、おそらく最も長く受け継ぎ来られているものだと思います。千三百年前に形作られた雅楽の定義の中にも、日本古来の神楽が含まれています。雅楽の中に分類される神楽の伝承は、多自然麿を祖とする、多家に由来する、宮中御神楽です。他にも、各地に存在していた神楽は、古代からの人々が喜びや悲しみのままに歌い踊った、心の表れでは無かったのだらうかと思います。

皆さんが良く知っている神楽の起源は、神話に登場されるアメノウズメノミコトと言われます。アマテラスオオミカミが天の岩戸にお隠れになり、この世の中が暗闇の世界になってしまい、残った他の神々がいろいろと考えた挙句に、楽しいことをせねば大御神さまは

出て来られないであろうと、岩戸の前で舞踊りをされる。

古事記の原文を読み下しますと、

「天宇受売命、天の香山の天の日影をたすき手次たすきに繋けて、天の真拆まさきをかつら疊として、天の香山のささ小竹葉ささをたぐさ手草に結ひて、天の石屋戸に槽伏うけふせて踏とどろみ轟とどろこし、神懸りして、胸乳むなちをかき出いでもひも裳緒ほとを陰に忍し垂れき。」

とあります。まさに神懸かりをされたアメノウズメノミコトが、心のままに、一心不乱に舞い踊る姿がそこにあります。自らも楽しみの感情を踊わに舞う姿には、アマテラスオオミカミにもその楽しさの感情が伝わり、何事か？と覗く姿になります。「神楽はな、神さんが楽しむって書くねん」、冒頭の今江宮司の言葉が思い出されますが、あつ！今江宮司さんご存命ですよ！何かもうお隠れになったように伝わったかもしれません、九十歳を超えてお元気です！

私は長くお勤めさせて頂いた白山比咩神社で浪速神楽を学ばせて頂きました。白山比咩神社では、五年前まで今江宮司にお越し頂いておりましたが、四年前から私が後任をお引き受けすることになり、近くに居ります関係上、年一回の講習会の他に、月一回のお稽古日を設けて指導にあたっております。白山比咩神社では、巫女さんではなく、舞女と称し

てご奉仕頂いております。ご祈祷毎に神楽を奉仕し、それが車のお祓いであっても、商売繁盛であつても、ご神前に祝詞を奏上する際には必ず御神楽が舞われます。御神楽はご祈願ご参拝の方が見られて、心のスツキリするものでもあります。本義はご祈願ご参拝の方が、舞女を通して奉納するものであり、神様に楽しんで頂くものであります。

浪速神楽は囃子方である、笛（これは雅楽にも用いる龍笛です）と太鼓、さらにチャンポンと呼ばれる銅拍子（洋楽のシンバルの小さなものでしょうか？）の演奏で舞います。舞方も囃子方も、まずはお唱歌という共通の歌を覚えてから、舞の形や笛の吹き方太鼓やチャンポンの打ち方を教わります。私は雅楽の方もやっておりますので、龍笛は得意としますし、雅楽と同じようにお唱歌を書いた譜面は存在します。しかし、雅楽と違うのは譜面にある音だけを吹いたのでは、浪速神楽にはならず、師匠に教わるることによって習うことのできるアヤという装飾が加わって、初めて浪速神楽の形が出来上がるのです。また、舞方にも舞譜というものがあります。例えば、舞楽「陵王」の舞譜の一部を申し上げますと

「右足踏み後、右隅の方へ大きく左足飛び右足披いて落居り、右を見る時右手腰より披き右足寄せて両手合わせ、右足擦りながら両手下へ披く…」

はい。これでは何が何だかわかりませんね。神楽でも舞楽でも、譜面や舞譜というマニュアルがありますが、それだけでは舞えない、神楽にならないという事です。

「神楽はな、神さんが楽しむって書くねん」神楽の本義ともいえる言葉なのかとも思いますが、では神さまに楽しんで頂くためには何をすれば良いのでしょうか？先ずは自分が、譜面などのマニュアルに留まることなく、指導者から教わる中に、その意味や心を感じて奉仕することが肝心です。浪速神楽の演目に「吾妻」（胡蝶の舞ともいう）があります。浪速神楽には神楽歌が付属しており、吾妻の神楽歌は「広前に扇かざして奏づるを、蝶の遊びとみそなはしたまふ」とあり、これが蝶の姿であることがわかります。扇二つの舞ですが、いかにも蝶の飛び交う姿のように舞うのが良いのだと思います。また、そのように舞うことができるように、日々お稽古に励むわけです。ただただ、美しい舞姿を見て、「ああ綺麗！」「あんな風に踊ってみたい」という思いだけでは神楽は出来ません。そして譜面や今では映像でもお稽古できますが、そのようなマニュアルだけでも神楽は出来ません。双方がしっかり一致して初めて、神さまに楽しんで頂ける神楽ができるのです。そこにはもちろん努力も必要でしょうけど、さらに大事なのは自分が楽しむことだと思えます。演奏しながら舞いながら楽しめるまでにお稽古を積むこと、お稽古を積んで、しっかりきち

んとしたものが出来上がった、さらに上に楽しみはあります。

今日は神楽を題にお話をしましたが、この世の中にはマニユアルが蔓延^{はびこ}っており、その根底にある意味や心が失われているものも少なくありません。皆さまこれを機に、形と心というものを改めて考えてみてはいかがでしょうか？

(石川県 白山神社 宮司)